特8
759

三河後風土記卷之二目錄

○信忠籠居隱居清康家督の事
　幷清康岡崎山中の兩城を襲ふ事
○大久保忠勝智計の事
　幷能狂言の席ゐて落合內膳爭論の事
○信定逆意親盛討死の事
　幷宇理落城の事
○清康尾州守山へ發向の事
　幷清康最期の事
○正就幼君を補佐せる事
　幷正就今川家を頼む事
○忠定靈夢を蒙る事
　幷廣忠岡崎へ歸城の事
○道閑信定ゞ命乞の事
　幷廣忠信定の罪を赦せる事
○竹千代誕生の事
　幷於大の方離別の事
○信定忠尙德川を弦さ織田へ歸る事
　幷信孝驕慢の心を起せる事
○忠倫盲人を以て問者となせる事
　幷平三郎忠倫を害せる事
○德川勢山中の城を乘取事
　幷廣忠今川家へ加勢を頼む事
○戶田父子竹千代と奪ふ事
　幷金田安倍勇戰の事
○織田今川小豆坂ゐて合戰の事
　幷織田敗軍の事
○德川廣忠沒し給ふ事
　幷織田信長家督始て明言の事
○雪齋安祥の城と落せる事
　幷竹千代駿州今川家へ到る事

三河後風土記卷之二目錄畢

438
759

明治十九年三月二十六日內務省贈付

三河後風土記卷之二

東京　大村弼八郎編

信忠籠居隱居清康家督の事　幷清康岡崎山中の兩城を襲ふ事

扨も召川傳太郎忠輔ハ幼年の時より信忠ゐ仕へ晝夜の勤おれバ信忠も愛を加へて召仕はれけり然るヨ此節諸老臣の面々彼の忠輔を招きて種々樣々ゐ語らひける故忠輔も信忠を傷痛しくハ思へども傷家の爲ゐハ替難しとて老臣の人々ゐ同意しけれバ酒井本多榊原荒沼大久保等の諸老臣密々計略を廻らしけるとハ雖も信忠ハ夢ゐも知り給ハず晝夜となく淫酒ゐ耽り剩へ心荒々しく諫むる者ハ立所ゐ殺害せられ好佞の惡人等晝夜傍らゐ勤仕して惡行をのみ勸め奉れバ之を諫む者大方ならず頃しも大永二年壬卯三月三日桃花の宴を開らんとて信忠彼佞人共を召集めて酒宴を催され酒酣ゐ及び傷機嫌宜敷折柄傳太郎忠輔ハ前へ出けれバ信忠平素よりも悅び給ひ莞爾として汝何とて今日の宴會ゐ遲參したるやと尋給へバ忠輔畏りて今日の遲參ハ某ゞ親き者の方ゐ婚姻之ありしゆゑ其賀儀として相越夫ゞ爲遲延仕りしと申上けれバ信忠聞うれて彌機嫌能戲れ給ひ花嫁なれバ定めて美麗なるべしと宣ふゐ忠輔豫て計りし事ゐれバ爰ぞと思ひて言葉を飾りハ意の如く彼の緣女ハ唐土の楊貴妃我朝の小野小町ゐもをさ〳〵劣らぬ美人ゐハ彼ゞ如き美婦今日我君のハ宴席ゐ有ならバと存じハ得共拙者ゞ心底ゐ任せヤさず遺憾の事ゐハとヤけれバ元より好色の信忠なれバ忠輔ゐ謀らるゝとハ夢ゐも知り給はず殊ゐ忠輔のヤ事故眞實と思ひ居丈高ゐなつて刀遐取顏色朱の如くゐ怒り忠輔汝如何なれバ心憶し此席へ遲來らざるや我ゞ領內ゐ住する者一人として信忠ゞ命ゐ背くべき仮令主ある女ゐもせよ唯一日の酒宴の相手をせざるハ最も憎むべき奴なれバ其儘ゐハ捨置難し信忠ゐ案內せよ彼者方へ立越我召連て來るべしと大ヨ怒り給ひけれバ忠輔仕濟したり

と思ひつゝほ意を任せほ案内仕つるべくいへどもほ顔色荒きほ威勢わてゝ彼必ず逃去る事も計られず然れゞ迎無躰を召具し給ひてゝほ宴席の興も有べからず只々穩便のほ計策を以て召寄せられなゞほ慰みわも相成べしと眞質わ申上げれゞ信忠漸々わ心解け然る上ゝ汝宜敷計ひいへとの仰せわ忠輔畏まり然れゞ恐れおゞら某しゞ妻の乘物わ召れ部屋見舞と稱して彼ゞ宅へほ越あらゞ誠の事と心得ほ對面仕つるべし其時圖を外さず召具し給へと申上けれゞ信忠大いわ悅び疾々用意致せ我も又支度すべしとてほ側仕への女中ゞ着用したる小袖わ着替て立出給へゞ用意の女乘物を舁据げるわゞ信忠即時わ乘移り給ふと等く大勢駈來りて舁出す時わ石川伊太郎高聲わ君既わほ行跡宜しからずほ一族幷ほ家人恨みを含み敵方へ志ざしを通じほ家危急の時わ至れり此故わ忠輔是非わ及ゞず不忠の者を絶して老臣の面々と心を合せ僞謀を搆へ押て大濱へほ隱居なさしめ奉つるなりと申上れゞ信忠乘物の中わて聞給ひ大いわ驚きおのれ忠輔主君をたゞらる大惡人其儘わ閣らんやと切嚙をなして乘物を踏破らんと爲給へど元來嚴敷用意せし故其事さへも叶ずして無念〳〵と狂氣の如く暴廻り給ふ中早彼大濱の別莊へ到着しける去程わ信忠ゝ此所へ押込られしより先と異し身とありて愛年月を送り給ひしゞ享祿四年七月廿七日遂わ逝去なし給ひぬ法名安栖院殿春孝道幽大居士と号しける斯て石川傳太郎忠輔ゞ忠節わ依て信忠を大濱へ押籠て隱居なさしめ其以後道閑の仰として永正七年わ誕生有し信忠の嫡子仙千代（清康と号す）今年十三歳わ成らせたまふを家督として二男藏人信孝わ三木の鄕を讓られける扨も清康家督を相續せられけるゞ父信忠わ似ず寛仁わして英才雄略兼備し給ふ故一族を始め家人の面々大わ悅び信忠の時ふ背きたる輩も大略歸參なせしゞ則ち安祥の城へ諸士を集めて饗應せられける然るわ岡崎城の留守居松平彈正左衛門昌安ゝ元來紀伊守光重ゞ子わして和泉守信光の孫なりこの昌安兼て自立の志し有りて岡崎の城わ楯籠り安祥へ出仕せざれゞ清康心中怒り給へども家督の始めといひ殊わ幼君なれゞ憚はりながらも捨置給ふ所わ昌安又山中の城をも横領して益逆威を震ひけるわゞ大永四年二月上旬ふ清康ゝ大久保五郎左衛門忠勝を召て仰らるゝ昌安我幼年なるを輕んじて岡崎山中の兩城を掠め取る事不屈き至極の事ども なり此事疾より知ると雖も我幼少なれゞ打捨置きしゞ今年既ふ十五歳あるわ依て今ゝ昌安ゞ不義を糺すべき時至れり故わ清康自ら人數を率して昌安を誅戮し岡崎山中の兩城を取戻さんと思ふなり急ぎ此由諸士へ觸知らせよと有りけれゞ忠勝畏まつて申上るゝほ諚の如く岡崎山中の兩城ゝほ當家のほ領地なり然るわ彈正左衛門心の儘ふ致すわと遺憾の事わい得共唯今是を攻取りたまはんとてほ人數を差向けられいとも彼の兩城ゝ要害無双の城地なれゞ味方の小勢をもつて容易わ取りもどすこと難し若し戰爭わ及び五六日も過ぐるわおいてゝ昌安一身の防戰叶ゝずして或ひゝ駿州わ加勢を乞又ゝ尾州の織田などへ同意して加勢を乞ふならゞゆゝしき事わ大事わ及ぶべし只々謀計を廻らし火急わ取り戻すこそ宜しからんと勸めしゞ清康是を實わもと思し召し大久保ゞ言葉わ隨ひ專ら彼の兩城を取戻すべき策略をぞ廻らしける然るわ同年五月廿八日巳の刻より雨風烈く雷鳴頻りわして人民門戸を開く能ゝず白晝とても闇夜の如し此時大久保五郎左衛門忠勝俄わ鎧を着して清康の陣前わ出天の時既わ至れり両城を乘取べきゝ此時なり今日火急わ岡崎山中の兩城を襲ひ取んと清康を急ゞせけれゞ清康大いわ歡喜し即時わ軍兵を催促し人數百五十四人電光雷の音も厭ゝず申の刻計りふ山中の城邊へ押寄ると等く鬨の聲を揚て城門わ走り入るわ折節風雨烈しけれゞ汕斷の城兵是ゝ如何わと周章狼狽事大方あらず味方ゝ是を得たりと射伏切り伏薙まとり暫時の間わ七十四人を討取終ふ城を攻落しけり斯て漸く雷も止み風雨も大いわ鎮る頃山中の落武者共

岡崎へ逃來りて山中の樣子を注進せしゝに大將昌安大いゐ驚き是いと詞りゐ周章狼狽前後忘却する所ゐ城中俄ゐ騷動して驚破敵寄來れりと上を下へと混亂す此時昌安士卒ゐ下知して城門を差固め人數を配りて防戦の意用をなさんとするゐ大久保五郎左衛門忠勝眞先ゐ進んで攻懸る此折安祥の城ゐ殘り居たる酒井本多榊原菅沼等を始めとして追々ゑ駈來る故人數倍大勢あれゝ昌安彌驚き士卒ゐ下知し今宵詞りい什麽ゐもして堅く守るべし夜明なゝ間道より人を馳させ東三河の牧野傳藏ゐ加勢を乞敵を悉く追拂ふべしと其搆へなし居たる所ゐ大久保忠勝豫て此事を察しける故士卒を勵し唯一擧ゐ乘取べしと嚴敵下知して攻立れ其彼方も堅固ゐ守れゝ容易ゐ落べくも見えざりしゐ其夜も既ゐ丑の刻ばゝり城中の小屋〳〵俄ゐ黑煙り立て燃上る故城兵共是を見て彌狼狽騷ぐ處ゐ山中城より逃げ來る者共四の聲を揚て煙の中より切て廻る城兵共い思ひ寄らざる事あれゝ以の外ゐ周章狼狽是を見て大久保忠勝大音ふすいや內通の輩相圖すると覺ゆるぞ面々速りゐ城へ入よと呼はり〳〵眞先ゐ進んで當城の一番乘大久保五郎左衛門忠勝なりと名乘即時ゐ堀ゐ乘り上れゝ是ゐ氣を得て一同ゐ宛然蟻の集る如く塀を乘越〳〵入り亂るれゝ昌安防ぐゐ百計盡て是非も別たず本城へ引退きて籠城しける此時昌安熟考へ此の如くゐていゐ池も戰ひ利有まじと頓て清康の許へ使を馳當城を返上し幷ゐ婦人を奉つるべき旨を達しける彼の婦人い美麗の聞え高き者故清康則ち許容有て其旨ゐ聽じ給ふ然れゝ德川の猛勇ゐや恐れけん西三河の國侍共皆清康へ歸伏したり

因ゐ云酒井本多大久保菅沼小笠原石川榊原是を安祥の七譜代と云此外清康一代ゐ歸伏したるい岡崎譜代山中譜代と云ふ其餘い皆譜代と詞り唱へけり

斯て清康い心の儘ゐ岡崎山中の衞城を取戻したる事偏へゐ大久保五郎左衛門忠勝ゝ功なりとて其智勇を感じ給前へ召て此度の忠賞として何事なり共其望みゐ任すべしと宣ひけれゝ忠勝平伏して我君未だ二十歳ゐも至らせ給いすして只今の仰を承いる事心魂ゐ徹し有難く存じ奉つる去なゝら當時君の御領分未だ廣大ならざれゝ某卿ゝ所領の望みいいず只々君の武勇秀で給ひ隨つて諸士の戰勢を以て敵國を切取ゝ手廣く相成るの後只今の言葉を捨たまいず忠勝ゝ子孫をゝ見捨下さるまじと言上しけれゝ清康涙ゝ流したまひ汝ゝ忠勇我何ゝ忘却すべきや我小身ゐして汝ゝごとき忠勇の士を褒する事能いず然れども功ある者を賞せざれゝ諸士また何ゝ功を勵むべきや何事成共所望すべし其意ゐ任すべしと仰せけれゝ其時忠勝然れゝ分國ゐ立置るゝ市場升取運上を某ゐ下し賜るべしと所望しけるゐゝ其望みゐ任せたまふゝ依て忠勝い有難しと請して退去せしゝ清康忠勝ゝ誠忠の士ゐ似合ざる事を望むい一應合點行難しと思し召され近習ゐ仰せけるい忠勝事我幼少の節より片時も側らを離れずして守護なす忠勇の義士あるゝ曾て我ゐ教訓しけるい凡戰國ゐ生るゝ身いい金銀財寶ゐ心を懸る事なく只々勇士を尊み重んず時い必ず天下ゐ大功を立べしと云り然るゐ年老て智もくらみしゝ利欲を好むこそ不審と宣ひ密ゐ近習の士を隱目付として忠勝ゝ樣子を窺いせ給ひけり

○大久保忠勝智計の事

幷能狂言の席ゐて落合內膳爭論の事

斯て大久保五郎左衛門忠勝い領分中の市場の里正を呼集めて申渡しけるい是まで役人等の利欲ゐ依て市場升取の運上繁く其ゝ爲市を立ざる事數年なり然るゐ當主清康い寬仁の君なれゝ此事を聞し召して不便ゐ思され向後市場諸運上恩免の上市場を立べき旨仰せ出されたり依て早々市場を立べしとの口上なれゝ一同悅伏して退さける是ゐ依て近鄕い更ゐり國中の者共此義を傳へ聞て大ゐ悅び誠ゐ例少ゐき仁君哉此君の爲ゐ忠節を盡さずんゝあるべうらずとて夫より少しゐても變りたる沙汰あれゝ我勝ゐ聞出し見出し前後を爭ひ注進する故安祥ゐていい間者をも出

さず居ながら敵國の動靜を速に聞知る事を得たり是偏に大久保が忠節に依てなり爰に櫻井の松平内膳正信定に長親の三男にして清康の伯父なれば諸臣敬ひ重んじ清康も慇懃に會釋せらる然るに此信定に元來邪智深く奸佞の人なれば忠節の諸臣に密に惡み疎んじけれ共流石に貴族の人なれば何れも此事を顏色にも出さず過しけるが當時に國中靜謐にして暫く軍馬の往來もあらざれば清康の仰せとして諸士を營中に召集め蹴鞠の爲に能狂言の興行せんとて松平の一門安祥の七譜代或に岡崎山中の譜代に言に及ぶ先祖泰親より以來德川家へ隨身の諸士に至る迄各大廣間に列座して淨能を拜見す其中に落合嘉兵衛（落合の鄕千石を領す）とて剛勇の者有りけるが朋友に向て私語けるに我等平生内膳信定の有樣を窺ふに始終淨當家の爲に害をなすべき佞人なり依て彼と刺違へて死せんと思へ共其便を得ず空く今日迄延引せり然るに今日幸ひの折柄なれば彼と口論をおし即時に刺違へべしと思へ我死するとも後來淨當家の災害を除きやすば生涯の本望是に過ず只某し乱心の沙汰に及ざる樣偏に賴入ありとて時刻を窺ひ居たりけり斯て淨能始まると思へ頃落合嘉兵衛に群臣の中を押分て内膳信定が設けし棧敷に至り彼の棧敷の端に着座しける夫と見るより内膳信定大いに怒り落合を礫と睚眦近習の士にむひ我席に座したるに何ものなるや無禮あり疾退退よと云ければ近習の士畏つて落合を退退んとするを落合動ず扨に櫻井殿の淨棧敷にていろ一向存せず斯の次第去ながら最早淨能も始るべし夫迄暫く許し給へと云ければ近習の者大に怒り嚴敷退去せんとすれ共落合に聞ぬ顏して見向もせざれば詮方なく信定へ此由を傳へければ内膳是を聞て彌怒り再び下知しければ近習の者乆々來りて早々立去られよ左もなくば人を以て引立べしと云ば落合怒りの面色にて大の眼を活と開き突然立て席の眞中に座し高聲に仰の趣き相心得れば得共主君の淨前と云諸傍輩の前もあり今更此所を立去難し依て此

棧敷に落合が借用や若我等此席に居て見物するに不都合あらば信定殿に申淨立あれと盛猛高になつて呼はれば元來臆病なる信定故彼が威勢に恐れけん怒りを鎭めて其儘に何の故障もなくりけるが其中に能も終りければ信定に早速落合が無禮を清康へ訴へ出る折柄諸士一同今日の淨禮として清康の淨前へ出けるに清康に智勇兼備し給ふ名將なれば落合が存念の程を能々推察ありしにや面々に向ひ汝等に先祖より代々忠功を累し輩らの子孫にして益々忠貞の志ざし金石の如し依て千貫二千貫の知行に聊か惜むべきよあらねども清康小身にして賞祿を與ふべき力なしと仰せありて落合が信定へ不禮せし事に聊か咎め給に却て信定と睚眦給ひければ流石の内膳も底氣味惡く席を立てゞ退出しける斯て清康二十歳にあらせられ身の丈五尺九寸智略武勇勝れ給ひし故漸次に近隣の諸鄕を切取猶尾州表へ出陣して織田の持城野呂岩崎両城を攻取内膳正信定を籠置給ふに依て福釜の松平右京亮親盛密に清康に目見舍弟信定奸邪なれば聊か心を免すべき者あらず然るに自國を離れて敵の手元に籠置れいに是如何の淨心中あるやと中ければ清康微笑して假令信定敵方へ密通する共何程の事有べきや信定當家へ對して害心有事豫じめ知ると雖も流石に伯父たる人を誅するに忍びず但し信定を野呂岩崎に差置事に彼が擧動を計り知らんが爲なりと云れければ親盛感服して退去しける後果して信定に尾州清洲の城主織田備後守信秀の方へ使者を以て申送りけるに某し德川清康の伯父にして尤も近き一族なれ共當時清康に我儘に募り常々某しを侮り蔑しろにする故家人等に至る迄無禮を働く事如何にも殘念に依て親族の好みを絶織田殿の旗下に屬すべし但し此義露顯に及ばゞ清康必ず攻來るべし其時こそ加勢を賜るべしとの口上なれば信秀聞て暫く思惟し其返答に曰く仰越る趣き承知致しに共足下伯父甥の信義を捨て當家へ荷擔の事更に眞實と成難し依て確と伯父甥義絶の證を顯した

まいゝ貴命ゐ任すべし然なくバ諸人疑念ゝ起し是を散ず
るゐ許あらんとありけるゐゞ信定ゝこの義ゐ常惑しけるゞ
何思ひけん時もあらバゝと心ゐ秘し居たり去る程ゐ清康い
此事を夢ゑも知り給いねバ熊谷備中守直盛ゞ籠りたる字
理の城を改取るべしとて既ゐ評定一決し西三河の軍兵八
千餘人を相催し大手の大將ゐ福釜の松平右京亮親盛副
將ゐい櫻井の松平内膳正信定と定め軍兵五千餘人を與
へしゝバ両將則ち命を請て進發も又搦手の方へい清康
自身三千餘人を率して發向し給ふ

○信定逆意親盛討死の事

并字理落城の事

去程ゐ享祿三年八月下旬西三河の軍勢八千餘人未だ夜も
明離れざるゐ鯨波を作つて攻懸るゐ城中ゐても豫て期し
たる事なれバ備中守直盛下知して同く鬨の聲を合せ大木
大石を投下し弓鉄砲ゝ射懸打懸透間もあらせず防ぎ戰ひ
終日勝負も見えざりしゞ稍暮方ゐ及びし頃双方共ゐ人馬
の勞を休めんとて互ゐ兵を引取けるゞ二陣ゐ扣へし副將
信定此時なりと思ひけん敵陣へ軍使を以て豫て織田殿へ
ゲ入たる旨もあり幸ひ先手の大將右京亮親盛始め軍兵
共今日の戰ひゐ大いゐ疲れ陣中の備堅固ならず依て今宵
一夜討せらるべし某い二陣ゐ扣て決して救ひゐ應せずと
密ゐゲ送る處ゐ熊谷答へて仰せ越るゝ趣き承諾いへども
凡軍中ゐていい確證あらずんバ卒爾ゐ人數を出し難しゆゑ心
底誠ならバ親盛ゐ夜打を勸めて今宵我城へ押寄たまへと
ありしゝバ信定い是ゐ應じて自ら親盛の陣所ゑ行て邪智
佞弁を以て兄親盛を欺き夜打の事を促しけれバ親盛い信
定ゞ僞謀と知らねバ忽ち是を機會として敵城を攻拔べし
と同意し俄ゐ軍を廻し其夜子の刻を相圖ゐ敵の城邊へ兵
を勵し進め〳〵と押寄るゐ敵將熊谷い豫て内膳信定ゞ相
圖ゐ依て城中より伏兵を出し置たる處へ親盛眞先ゐ進ん
で押寄るゐ伏兵一時ゐ起ると等く追取圍みて我打取ん
と呼きけれバ右京亮親盛大いゐ驚き扨い敵の備へ有りし
ゝ然れ共何程の事かあるべき打破つて退くべしと采幣を
腰ゐ納め三尺五寸の太刀を拔持眞先ゐ馬を飛せて一條の
血路を切開き面々此所だゐ切拔るゐ於てい後陣ゐ信定ゞ
備たれバ助け來らん事必定なり少しも氣を屈せず戰ゑべ
しと下知しける所ゐ是い如何ゐ士卒追々注進して後陣の
信定殿い陣所を捨て何方へか落行れし故士卒も悉皆く散
亂して一人だも居らずと報じけれバ親盛ゐ隨ひ居たりし
軍兵共此報を聞と等く我先ゐと落失て暫時の間ゐ主從僅
ゝ十三騎と成りたれバ親盛大ゐ怒つて言甲斐なき未練の
信定慮病不義の逆賊なりと罵り我い此所ゐて打死すべし
と太刀を鞍の前輪ゐ押當立上りつゝ身を繕ゑ所ゐ一の流
矢飛來りて内甲ゐとつしと立たり流石鬼神を欺く右京亮
親盛なれ共何ういい以てたまるべき馬より地上へ眞逆倒ゐ
轉び落てゞ死でける此時搦手の大將清康備へを堅固ゐ立
て夜を明し給ゑ所ゐ大手の方ゐ當りて鯨波の聲矢叫びの
音天地ゐ響きて聞えけれバ扨い味方城攻するや馳合せて
一同ゑ攻破らんと思ひ給へゞ難所を前ゐ受給ゑ故氣い焦
れ共心ゐ任せず今敵方ゐい大手の軍を助けて城中必ず
無勢なるべし此虚ゐ乘じて攻破れと無体ゐ指揮して進め
らる此時敵城ゐい豫て備を堅く設けたれバ大木大石を投
下し矢玉を飛せて防ぎける然るゐ敵兵の中ゑ岩瀬庄左衛
門と云ゑ者あり元來清康ゞ譜代の足輕なりしゞ不行跡ゐ
して傍輩を談合辻切などの狼藉を行ひける事度々ゐ及び
遂ゐ捕れて死刑ゐ所せらるゝを主人清康是を助け宥して
追放せられしゐ彼一身の置所なき儘此城中ゐ入て飢渴を
凌ぎ居たりしゞ先非を悔善ゐ飯して主君の大恩を報せん
とて日頃忘れざる處ゐ斯る戰爭ゐ成りしゝバ是究竟の時
ありとて傍輩の兵卒等を語らひ城中所々ゐ火を放ち煙の
中より聲々ゐ驚破城中ゐ返り忠の者あるぞやと呼いりけ
る故今迄猛く勇みたる城兵共其聲ゐ驚き我先ゐと落行け
る清康い此機ゐ進んで乘破れと下知したまふゐ味方大い
ゐ勇氣を倍搦手を揉破り終ゐ城を攻取給ゑ城將熊谷備

中守ハ信定ガ相圖ヲ依て城外ヲ伏兵を設け大ヲ打勝城中へ引入んと爲ふ城中黒煙となり城兵共追々逃出來り殊ヲ本城ハ既ヲ猶手より乘破れたりと聞て仰天し周章狼狽落行けり彼庄左衛門ハ後ヲ至り此時の功に依て再勸し其賞として三百貫の地を領せり斯て清康ハ宇理の城を攻取給ひ其勢ひヲ乘じて東三河の牧野傳藏兄弟を誅伐すべしと評議一決の上天文元年十月上旬西三河の軍兵五千餘人を以て牧野ガ居城へ攻懸たまふ然るヲ牧野傳藏兄弟ハ僅の三州一國を半ハ織田今川ガ領し半ハ德川牧野両家ヲて領する事遺憾あれバ時節を覘ひ德川家を亡ばさんと思ふ所ヲ此度清康自ら先鋒として發向すると聞是こそ幸ひあれいそぎ出張して雌雄を決し両家の安否を極ひべしとて七千餘人を引率して豊川を渡り越堤地と云ふ所ヲて終日合戰して双方勞るゝ折柄清康の旗本より坂部友之助杉浦鹿之助久世善五郎以下究竟の輩ら先ヲ進んで身命を惜まず戰ひて遂ヲ敵將牧野傳藏舍弟傳次同新次新藏兄弟四人共ヲ打取ける清康大ふ悅び給ひ此勢ひヲ乘じて田原城をも攻取らんと評議ありし處ヲ戸田彈正早くも此由を聞て大ヲ驚き忽ち降參して城を明渡しけれバ則ち人數を入られ吉田ヲ十餘日逗留有りし所ヲ山家三方作手長篠野田牛窪一連木西郷等の諸城清康の武威ふ恐れて招ガざるふ皆悉く降參しける依て三州一圓清康の手ヲ屬せしりバ甲州の武田信虎使を以て交身を結バんと慇懃ヲ申送りたり

○清康尾州守山へ發向の事 幷清康最期の事

斯て清康ハ武威倍壯んヲして恰も旭の昇るガ如くあれバ尾州地方ヲても志ざしを通ずる者多くゆ出馬有ヲ於てハ内應すべしと人質を出すふ依て清康悅び給ひ然らバ織田家を倒して尾州を切取夫より遠國迄も及ぼし京都ヲ旗を上んと天文四年三月上旬一万餘騎を率して尾張國へ發向ある信秀此事を傳へ聞て大ヲ驚き防戰すべき手立もなりしりバ居城清洲ヲ牆籠りて出張せず清康ハ諸手へ下知して清洲の城中を思ひの儘ふ放火して乱妨し給ふヲ依て信秀ハ諸士を招き集めて申けるハ德川清康其身勇猛ヲして當國へ乱入し心の儘ヲ乱妨すると雖も我今彼ヲ勝べき計策なし當家の浮沈此時ヲ有り如何ヲ謀計を廻らすべきやと評定有りしヲ平手中務進み出で仰の如く清康英雄ヲして武略ヲ長じたれバ中々武雄を以て是ヲ當る事難し宜しく謀略を用ゆべきなり幸ひある哉櫻井の松平内膳信定ハ佞惡無道ヲして清康を亡し所領を押領せんと存じ内々當家へ志ざしを通ずるころ究竟なれバ彼ヲ賞祿を約して計略を施す事良計ならんと言上せしりバ信秀大ヲ悅び密ヲ信定ガ陣所へ使を以て曰く貴殿の力を借清康を亡すヲ於てハ三州半國を分け與ふべしと申送るヲより暴惡の信定忽ち欲心ヲ迷ひ益無道の心增長し信秀ガ依賴ヲ應じて病氣と稱し居城櫻井へ歸陣しける依て清康大ヲ怒り諸老臣を召集めて評定なし信定ガ進退動靜を考ふるヲ去る宇理の城攻の節兄親盛を捨殺しヲし今又虛病を搆て居城櫻井へ歸陣なも其心体正く敵信秀ヲ一味すると覺えたり仮令異變して織田家へ屬する共信定如きガ武略恐るゝヲたらずと雖も彼其儘ヲ捨置べきふあらず依て先ヲ内膳を誅し内應の根を絶て敵の心を弱らせ其後尾州を襲ハんと思ふ汝等如何思ふやとあるふぞ安倍大藏少輔正就進み出で君の仰せ道理ヲいへ共當時集ガ類縁を考ふるヲ大給の松平源次郎親乘小川の水野下野守信元長澤の松平上野介康忠等皆内膳殿ガ聟ヲていへバ此輩を談合ヲ於てハ大軍ヲも及ぶべし殊ヲ嗣の疑ハしきを宥りヲもるハ仁君の道なり只々差向ふ信秀を攻亡すこと然るべしと申けれバ清康莞爾と笑ひ予若年と云殊ヲ小身の時ヲさへ大敵を切靡け今ハ天下ヲ大功を立んと思ふ所ヲ信定如きふ同意の者ありとて何ぞ憶すべき速りヲ誅戮すべしと仰けれ共正就是を應諾せず達て諫め奉つり君ほ大事を思し給ハバ猶小事の爲ヲ兵を動し給ふべうらずと諫爭せしりバ清康も遂ふ其理ヲ伏し櫻井への發向を止り尾州守山へと押

寄給ふ然るゐ内々安倍が出頭を妬む者ありしや安倍正就ゝ豫て信定と一味同心したる故今度櫻井の城攻を止めたりと陣中に於て取沙汰頻りなれゞ大藏此事を聞て遺憾ム堪ず或夜嫡子彌七郎を呼密ゐ申けるゝ我既ゐ不慮の旋名を蒙る事口惜し其仔細ゝ信定と一味同心して主君へ弓を彎不忠不義の逆臣なりと風聞頻りゐる由是何者の所爲なるゝ其奴を穿鑿して召捕へ我潔白を解んと思へど何奴ゐるゝ未だ判然せざれゞ寃枉を明す術計なし然れゞ覺えなき罪を受て死刑ゐ處せられんも計り難し我若し誅せらるゝ其努々君を怨む事勿れ我死したる後ゝ汝此所を逃れ山林田町ゐ身を潛伏爰ゲ枉寃を主君へ告參らせ末代迄も忠勤を勵み先祖の家名を失ふべからず斯汝ゐ遺訓するゝ祖先より代々當家の厚恩を蒙りしを思ふが故なり君恩の厚き事ゝ高山よりも猶高く大海よりゝ猶深し此故ゐ我ゲ亡とても誠忠潔白を旨として必ず恩を忘却すべからずと怨ろゐ說諭し神文を認め彌七郎ュ渡しけれゞ正澄之を聞て感涙を流し父ゲ命を畏みつゝ其席ど退き早速本陣へ推參して清康へ言上せんと未明の比陣中へ到りけるゐ如何なしけん清康の馬綱を放れ陣中を列廻りて騷ぎけるゐゼ清康目を覺して表の方へ出たまひ騷動を押鎭めんと聲高ゐ汝等逃すゐ捕押へよと宣まひけるを彌七郎ゝおのれの事と聞誤り是ゝ君の仰こそ不審し罪をも糺し給ゝずして捕るとゝゆ情なしと一闘ゐ私推して惑乱し忽ち狂氣したりけん自身帶せし村正の一刀突然引拔主君を目懸て斬付たり其太刀先の尖鋭して敢果なくも清康ゝ腰の番ひを只一太刀ゐ切れ給ひ其所へ吻と轉びける其時植村新六郎桑安蒐來り夫と認て扳打ゐ彌七郎の小髮より頰先懸て斬付しゲ猶も焦立返す刀ふ胸腸深く刺貫くュゼ彌七郎何ゝゝ以てたまるべき空を摑んで息絶たり斯と知るより陣中ゝ以ての外ュ騷動なし譜代の面々駈來り各主君の遺骸を守護し悲歎大方ならざりける此時天文四年十二月五日ゐして清康廿五歳なり惜哉智勇兼備の名將と雖も狂人の爲ゐ斯る非業の死を遂給ひしゝ遺憾と云も餘りあり法名ゝ善德院殿年叟道甫大居士と号しける

○正就幼君を補佐する事
幷正就今川家を頼む事

去程ュ清康ゝ尾州守山の陣所ゐ於て不慮の横死を爲給ふゐより譜代の面々只忙然として居たりけるゲ酒井本多大久保石川等の諸士評議の上岡崎へ引退くべしとて清康の遺骸を守護引取ける又安倍大藏を擒ゐすべし迚大藏ゲ陣所へ人數を差向し所ゐ正就ゝ自ら繩ゐ懸りて出けれゞ則ち召具して岡崎へ引取たり然るゐ内膳正信定ゝ間者共ゲ告を聞と等く長親入道道閲の懸家へ到り佞弁を以て種々虛言を演安倍大藏幷ゐ彌七郎ゲ死骸等ゝ何なる刑ゐ行ひゝ哉彼等父子ゝ織田方へ一味するカ又ゝ當家を横領せんと企る者故嚴重罪せんと存じゝ次ゐ清康ゲ家督の儀ゝ如何ゐ決定せらるゝなど尋ねけるゐ道閲宣ふやう清康ゲ嫡子仙千代十一歳なれゞ家督たるべし後見ゝ即ち汝と定む

ぞと聞て信定心中ゑ深くも之を喜びける斯て安倍大藏を白洲へ引出し道閲自身ゐ糺明せらるゝゐ正就別して中上る事之なしとて首を垂て陳謝しけれゞ道閲重て汝が嫡子彌七郎假令狂氣したりとも君を誅せし事輕からず然るゐ汝何とて自殺せざるやと仰ある其仁慈の深さゐ正就感涙を催し涕糺明なきゐ自殺なさゞ武士の名義相立難しと中上れゞ道閲思惟〜給ひ驚て大藏を石川ゐ預け彌七郎の死骸を驗められしゐ大藏が起證文出けるゐそ忽ち疑念晴急き自身大藏が繩を解宥し給へゞ正就其仁心の深きを感じ今こそ亡君清康君へ中譯仕るべし迚既ゐ自害せんとするを道閲制して汝日頃の忠貞ゐ似合ざる所存なり自身の潔白を立て當家の危急を輕んずるゝ身を存命て末永く倍忠義を盡すべしと宣ひけれゞ大藏ゝ重々の仁惠ゐ服し誠ゑ忠志有と雖も侫人有て仕奉るゑ詮衛ゐしと中上れゞ道閲聞て當家既ゐ武威興隆せんとする處に彌七郎が不届より今更危きゐ至る汝其身有と思ゝず忠誠を勵し當家を保護せよと宣ひけれゞ大藏畏み其仰を蒙る上ゝ假令粉骨碎身せる共ゆ家の爲ゐゝ厭ひ中さずとて道閲の厚恩を謝し勤仕怠りおゝりけり

附言安倍正就ゝ誠忠潔白の士あれゞ嫡子彌七郎が不忠の事ゐ依り思慮を遲し我が苗字を相續する時ゝ後々ゐ至るまで逆心の子孫なりと後指をさゝれん事口惜迚妾兩人ありしを一人の妾ゐ男子を附金子を添て何方へ成とも再緣せよと中渡し今一人の妾ゝ懷妊の儘ゐて井上半左衛門と云小身の家人へ遣しけり然るゐ此子成人して半九郎と云しが後年家康の時ゐ至り召出されて井上半左衛門と号す是則ち井上河内守の先祖なり父半左衛門其頃八百五十貫を領しけると又今一人の妾ゝ幼兒を養育して一生後家ゐて終りける其子家光の時召出されて彌一郎と号し後ゐ安倍大藏少輔と云ゑ是則ち安部摂津守の祖なり

却説織田信秀ゝ清康横死ゐ依て仙千代家督ゐ備り内膳其後見たる事を聞て大ゐ悦び使者を以て信定へ中送りけるゝ豫て契約の如く三河の半國渡さるべしと催促す信定聞て未だ其事計ひ難し但し織田殿當國へ乱入し給ゝゞ信定内聽して仙千代を殺害すべしと返答せしゐど天文五年二月上旬織田信秀八千餘人を引率して大樹寺表へ出張す此故ゐ諸臣仙千代君の御供して出陣せべしと言信定ゝ心中ゐ一物有りけれゞ未だ幼稚の仙千代君出陣の事宜からずと云立評定區々なりしゞ遂ゑ一決して先君清康の舍弟三木の松平藏人信孝と鵜殿の松平三郎康孝を兩大將として軍兵八百餘人を差添岡崎より十四五丁計り押出し井田郷ゐて合戰す話ゝはつて内膳信定ゝ諸士殘らず出陣せしゝゞ潜ゐ仙千代を殺害すべしと思ひ戌の刻計りゐ唯一人廊下傳ひゐ御殿所の障子を押明けるゐ安倍大藏折節病氣ゐて同姓四郎兵衛忠定を頼みて守護しけるゐそ信定ゝ女房達計り成るべしと思ひの外忠定詰居たりて其面魂ひ尋常あらざるを見て心中大ゐ驚きしが然あらぬ体ゐて什麼ゐ其方何とて此所ゐ安居するや何故出陣せざるぞと言ふ四郎兵衛斯る時ゐゐ一門御親族とても聊か心を寛し難し異心の輩多くして仙千代殿を殺害し或ゝ奪ひ取て人質とし我意を振はんと巧む族是ゐるゐ因て一寸も此席ゝ退出難し惡人無道の者來るとき忽ち引捕へん若又力ゐ餘れゞ刺違へて死を決す其爲斯守護し奉ると信定を確と白眼動ともすれゞ飛懸らんと勢ひこんで扣けるゐそ内膳信定大いゐ腦を冷し自身を指て云るゝと思へゞ最底氣味惡く鼠々として立退けり其ゝ扨置戰場ゐてゝ敵ゝ多勢味方ゝ小勢なれゞ先駈したる小笠原植村高力左近其子平五郎以下四十三人討死しける依て味方危く見えける處ゐ敵將信秀頻りゐ下知して盛敵挑み爭ふ折しも井田八幡宮の御社鳴動して俄ゐ黒雲覆ひ雨風頻ゐ降來りて織田勢ゐ吹懸くる故織田勢向ふを見る事能ゝず此ゐ至つて酒井本多大久保等ゝ大いゐ氣を得て揉立〜戰ひける織田方多勢と雖も大ゐ驚き戰ふ心もなく將卒共我先ゐと尾州を指

て逃行けるゐぞ備後守信秀も是非なく一返しも返し得ずして引退けり德川勢い益〻勇氣を得て追詰〳〵百六十餘人討取勝閧を揚て歸陣しける却説内膳信定い己ゞ巧の相違して殘念ゐ思ひ道閧へ申上るい安倍四郎兵衛事何人の許しを得て興向へ出入するや是偏ゐ幼年の仙千代を侮る故ゐりと讒言して遂ゐ追放し如之ならず德川家の譜代を己ゞ下官の如くゐ思ひ輕蔑ゐなしけるゐぞ各大ゐ怒り憎まぬ者ぞなりける〻當時仙千代の後見たるゐよつて皆々腕を摩て堪へける内膳信定い諸臣の寸暇を窺ひ何卒して仙千代君を殺害なさんと思ひけるを安倍大藏疾より推量して心を勞し斯る有樣ゐていぢ家督相續心許なし如何手段すべきと思ひ居けるゞ不圖一策を案じ出して天文七年三月中旬密ゐ仙千代を誘ひ出し岡崎を遁れ出て勢州神戸へ立越ける其頃東條持廣と云人神戸を領して此處ゐ住居しける是則ち清康ゞ妹聟なるゐ依て此人を頼みけるゐ異議なく承知し甲斐〳〵しく待遇けるゐぞ仙千代ゐも最頼母敷思され爰ゐ時節を待居給ひしゞ仙千代十三歳ゐて元服ゐつて德川次郎三郎と改め持廣の一字を取りて廣忠と名乘たまゝ然るゐ安倍大藏少輔正就い持廣を頼み何卒内膳信定を亡ぼして廣忠を岡崎へ歸し參らせんと種〻評定すれ共元來持廣小身なるゐよつて心底決せざりし處翌天文八年正月下旬持廣病死す然るゐ持廣の養子吉良若狭守義安密ゐ家臣を呼集め廣忠を捕ゐして尾州へ送り織田家の恩賞ゐ預るべしと相談一決しける由を正就聞て大ゐ仰天し然る上い片時も安住成難しとて廣忠を誘引神戸を逃れ出けるを義安疾くも之を聞出し捕ゐせんと六七十人の兵を出して頻りゐ跡を追駈たり然れゞ大藏い一世の浮沈此時なりと逸足出して逃けれゞ幼年の廣忠を守護して歩行ゐぞ里程も果敢〳〵しく進みゐねるを跡より追手い追懸來れゞ其危き事渕氷を踏ゞ如し如何いせんと正就い施す詮術もあらざりしゞ不圖傍を詠むれゞ右の方ゐ竹藪あり是究竟と思ひつゝ彼竹藪を潜り抜て向ふへ出るゐ是い什麼ゐ陸地ゐあらで海邊故流石の大藏正就も進退此處ゐ谷りて天を仰で歎息し最疾此處ゐて主從諸共亡ぶる事ゐと思ひつゝ源家の宗廟八幡宮を一心ゐ祈念しける折柄此方をさして柴を積たる小船一艘漕來るゐぞ大藏大ゐ悦び是偏ゐ神の危難を救いせ給ふなるゐと則ち彼ゐ便船を乞ひ事急なれゞ我々を其船ゐ乘救ひくれよ仔細い船中ゐて筭と語り知らすべし疾々と頼みけれゞ船主も主從ゞ難儀の形狀と憫れみて急ぎ船を漕寄るゐぞ二人い船ゐ乘移るゐ忽ち沖へ漕出し陸地遙ゐ隔りける然ゞ追手の者共此体を見て切齒をなせども其便宜さへあらざれゞ餘儀なく此處を退さて元來し道へと立歸り主人義安ゐ斯〻なりと其事柄を物語れゞ義安聞て遺憾ゐ思へど詮術なき儘事止みたり然るゐ廣忠い大藏と俱ゐ三州長篠へ若し給ひしゞ落着たまゝ所もあけれゞ心ならずも遠州へ漂泊されしゞ折しも雨ゐ逢ひ身を覆ゝ簑笠さへもあらぬ身の人の軒端ゐ彳み給ふゐ此家の主い主從ゞ難儀の狀を推察して詞を掛卒爾ながら此雨ゐ最ゐ難儀のゐ樣子故失禮ながら此方へ來り暫時休息給へりしと案内しける此處い遠州掛塚ゐて此者い鍛冶五郎兵衛と云者成しゞ主從の樣子を見て正く貴人ゐ在さんと心ゐ思ひ眞實ゐ勦り慰め此程のゐ波を緩々休め給へ迎両三日我家ゐ留置最懇切ゐ待遇けるゐぞ其心底を見定て大藏い主ゐ向ひ其方の心底頼母敷ゐ愛聊ゐ頼み度仔細あり何と承知い出來まじやと云を五郎兵衛聞敢ず何のゐ依頼ゐ存ませねどゐ遠慮あらせず仰給へとの返答ゐ大藏打點頭是ゐ在す若君い某ゞ主君岡崎殿ゐて在せども斯々の事ゐより漸く此處迄逃れ來れゞ本國へも歸り難く依て數代敵たる今川家を頼み俱ゐ力を合さんとす依て我等ゞ往來する間若君のゐ介抱を只管其方ゐ頼みたしと事を別て告けれゞ五郎兵衛是を快く承引するゐぞ大藏大ゐ歡喜委細を含め置き夫より自分い駿州今川家ゐ到り老臣朝比奈ゐ便りて某しい三州德川の家人安倍大藏少輔正就と申者なり主人清康不慮の横死を遂られ

し後嫡子德川次郎三郎廣忠家督せし虚よ一族内膳正信定逆意を企て織田信秀へ隨身し廣忠を害せんとす依て去年來より故清康の妹聟勢州神戸の東條持廣を頼むと雖も小身故軍兵合力成難し仍て何卒吳越の仇を雪されば盡力有て信定を亡し廣忠本頭安堵仕つりいにしへ永く今川家の旗下となりぬ先手を勤むべしと頼みける故朝比奈此事を義元へ披露しければ義元聞て臨濟寺の雪齋長老へ巽見を問れけるよ雪齋聞て窮鳥懐に入る時は獵人も是を殺さずと言り舊き仇ある德川家今味方に來る事是當家の幸なり然るに今正就が頼みを用ひなきに於ては必定尾州へ走りて危難を遁れんと計るべし然る時は仇に仇を重ねる道理なりとヲければ義元實もと其意に從ひ朝比奈を以て安倍大藏を呼出して曰麿たるを起し絶たるを嗣しむるは是勇士の望む所なり急ぎ廣忠を伴ひ當國へ來るべし義元力を盡して岡崎へ永住なさしむべしとありければ正就大いに悦び拜舞雀躍して急ぎ掛塚へ立歸れり時に天文九年二月十七日仙千代とともなひ遠州掛塚より船にて駿州へ赴きける

○忠定靈夢を蒙る事 并廣忠岡崎へ歸城の事

却説安倍四郎兵衛忠定は内膳正信定が讒言に因て涙々の身となりしが元來忠義の士なれば大藏が主君廣忠を岡崎城より連出して勢州神戸へ立退けるを聞己も彼所に到り見え隱れに守護しけるが再び神戸を遁れ給ひしより其後は更に在所を知らざれば是非なく神戸を跡にして遠州掛塚に聊か繰りあるに任せて掛塚へ來りつゝ知邊の方に逗留しけるが或日思ひ寄らず廣忠は廻り逢て大に悦び夫より正就と共に力を合せ君を守護して居たりける大藏が駿州へ赴きたる跡にて廣忠を愚め參らする所に大藏歸參して委細を語り聞せける故四郎兵衛は暇乞して再び三州へ立歸り廣忠君岡崎へ歸城有樣にて七社權現へ一日に七度づゝ三七日參詣の大願を思ひ立風雨霜雪をも厭ず日參して滿願の夜に至り通夜しけるに不思議や夢の中に三州大樹寺客殿の北の端に十二色の帷子掛ありしが客殿の裡より童子三人立出彼帷子を着し舞ひ謠ふ躰なり其時堂の左の方に内膳信定始め家臣居並びて見物す右の方には簾を卷上たる儘誰も居給はず縁側に四郎兵衛唯一人伺公しけるに淨衣に立烏帽子を着したる男德川家の旗を右に持左に判を押たる木札を持て四郎兵衛が側に來り今より後は旗木札と共に三河殿へ參らせよと權現の神勅なりとて四郎兵衛に渡されければ信定大いに感涙之を奪ひ取んと家臣に下知して周章騒ぐ折柄東の方より又一人鶴の置物を三尺計りに造り翅に眞紅の總を付盞の上へ種々の佳肴を盛並べて嚴重に持出るを見ると等く信定主從色を失ひ築地を乘越敵の内へ迯入と思へば行方を知らず愕然として夢覺たり四郎兵衛此靈夢を最奇事に思ひつゝも心に歡喜夫より井田八幡宮へ一日に七度づゝ又三七日參詣して頻りに主君廣忠君岡崎へ歸城相成樣と祈願しける又滿願の夜不思議なる哉八幡宮の門前に數百疋の馬ありしが四郎兵衛是は何事なるやと尋ぬるに馬飼の彦太夫之に對て岡崎樣に歸城の祝として神馬三百疋を當社へ奉納し給へと言りと思へば夢覺たり依て四郎兵衛彌悦び是諸神岡崎君を守護し給ふに疑ひなしと密に時節を待居たり斯て今川義元は廣忠の英智を感悦有て其年七月に至り廣忠を召れて三州茂呂の城は當家の持分なるに仍て先彼城に居住して岡崎の樣子を窺ひやさるべし吉良の城は荒川甲斐守頼時猶能く我に背きて織田家へ助力す依て岡崎を攻取る手始めに足下の下知を以て荒川を追落されよとありければ廣忠之を拜謝して直に軍兵を引率し吉良の城に押寄自身采幣を振て下知し給ひけるゆゑ諸卒勇み進んで短兵急に揉立〳〵攻立ければ城兵防戦の術を失ひ叶はずして降參す信定此由を聞て大いに感き廣忠當國へ來らば譜代の輩ら必ず内應すべしと思ひ急ぎ大久保兄弟大原成瀬等を井田八幡宮の神前へ

呼集めて申けるハ安倍正就廣忠を具して數代の敵たる今川家へ降參して曾祖父道閑へ敵對する事是盲語の擧動なり依て各彼等ハ隨いざると云一通の誓紙を出し道閑へ進上せらるべしとて面々より起証文を認めさせ之を道閑へ差出して自己ゞ身命の危からざる樣ハ計ひ先ハ安堵と此者等ハ心を許し万端密事を談じけり斯て天文十一年四月廿九日の事なるゞ大久保兄弟大原成瀬等會合して評議しけるハ我々起証文を書たれ共正統の家督たる廣忠君を爭ひ見捨奉るべき身命を顧みず忠誠を勵し岡崎へ渉歸城なさしむべき樣取計ひ申べしと談じける時ハ大久保新八郎曰當時岡崎の城代ハ濱人信孝君なれゞ我等行て對面し彼君を味方ハ依賴て信定を亡さん若しまた承諾なき時ハ馳進へて相果んとて夫より岡崎へ到り信孝ハ對面して申けるハ信定君奸佞ハして渉家嫡廣忠君を追出し渉知行を抑領する事惡逆も又甚し依て信定殿を退け廣忠君と岡崎へ歸城なし奉らんとす渉邊如何ハ思召やと顏色を正して問懸れゞ信孝聞て信定ハ叔父なり廣忠ハ甥なり依て何れを何れと愚意ハ及び難しと返答ありしゝゞ大久保新八郎居丈高ハなつて一刀を引寄扨ハ德川家の正統を渉邊麁略ハ思召やと眼中血走り罵りけれゞ信孝重て曰各當好を忘れず廣忠の歸城を盡力せる事實ハ誠忠の致る處然れ共我等當城ハ有ゞら無下ハ開き渡さん事道閑公の思召も如何あらん依て某しハ病氣と稱し豆州熱海へ入浴あすハより某しゞ不在を機として廣忠と入城さすべし迎城門の鍵を新八郎へ渡せしゝゞ新八郎も心解て悅びつゝ退出しけり斯て信孝ハ約ハ違ず不日熱海へ赴きけれゞ安倍大藏を始めとして忠心無二の輩らハ松平信勝同善一郎同彌十郎同彦四郎譜代ハて本多狼千代跡部正定中山勘左衛門鈴田平三郎同平九郎天野清右衛門柳村新六郎川井隼人石川傳七郎內藤勘太郎等各廣忠を守護して天文十一年五月晦日夜中岡崎の城へ到る時ハ鵜殿康高ハ兼て相圖の事なれゞ城門を開いて迎ひたてまつり安倍大藏ハ對ひ本丸ハ內膳信定ゞ無二の臣石川長左衛門康利舍弟康定兄弟ハて守護けるゆゑ我々ゞ力ハ及ばず如何して破らんと談じけれゞ大久保新八郎側より假令三面の鬼神なり共今更之を止るべきや何も暴廻りて攻立べしとて七十餘人ハ下知を傳へ勇み進んで攻懸るハ彼方ハ門戸を堅く閉固め鎭まり却て居けるハぞ是ハ遺憾ありと七十餘人呆れて門外ハ扣たりしハ案內知たる大久保新八郎塀を乘越入らんとしけるを夫と認めて扣へし面々我劣らじと跡ハ續き乘越〳〵城內ハ打て入樣子を見るハ彼石川ハ前後も知ず睡眠居けるゞ此物音ハ不計目を覺して驚きつゝも刀を取るよと見えしゞ近寄者を左右ハ切伏勇を奮て働きける其中ハ家來共も起立俱ハ力を盡して命を惜ず戰ひたり然るハ此事を聞傳へて酒井雅樂助正親石川與七郎清兼本多吉左衛門忠豊同平八郎忠高榊原藤兵衛長政以下の面々追々駈來るハ就中本多忠高眞先ハ進み味方の人數を押退〳〵石川を目掛て打て掛る夫と見るより康利ハ血刀振て馳向へゞ忠高乞々汝を討取らんと身を惜ずハ切結べゞ石川康定此体を見て走り寄んとするを透さず榊原藤兵衛後より白刃を持て康定ゞ肩先掛て乳の下迄二ツハなれと切付たり康利是ハ氣臆れして疾叶ハじと逃行處を本多忠高後より是も同く二ツハあれと一壁叫で斬倒せゞ家來等驚き狼狽して道も別たず逃散たり

○道閑信定ゞ命乞の事

幷廣忠信定の罪を赦す事

然ゞ廣忠岡崎へ歸城し給ひしゝゞ信定ハ隨身したる輩らも各志ざしを翻へして廣忠ハ歸順せざる者ハし是偏に安倍大藏ゞ忠節ハ依てあり迎安倍大藏を第一の長臣となされたり斯て岡崎の敗兵共ハ辛き命を助り櫻井へ逃行て委く語りけれゞ內膳信定大いハ驚き即時ハ使を諸方へ走らせ再び岡崎城を攻べしと通じけれゞ德川譜代の輩ら是を聞て彼使を捕へ打擲したる上惡逆無道の內膳信定ゞ家來ハい土產をやらんとて耳鼻をそぎて追返し我先ハと岡

崎へ馳參る者多かりしゝ信定大ゐ憤はり我籠城して信孝へ加勢を乞んと思ふ間もなく斯家臣等の異心是何ぞ恐るゝゐ足んやと大言を吐と雖も從ふ者ゝ纔三十餘人計り殘りけるゐぞ流石の信定も詮方なく尾州を指て落行ける向の方より酒井本多大久保榊原石川等馳來りぬ信定此体を見て大ゐ驚き今ゝ尾州へ落行事も叶ゝずとて辛くも其場を遁れ直ゐ道閲の許ゐ行て某し事忠節を抽で廣忠を守りけるゐ大藏以下の輩ら惡く心得信定國家を掠むる者ゐりとて乱暴狼藉大方ゐらず何卒父上の命令を以て愚子信定を救ひ給へと涙を流して言上しけれゝ流石ゐ父子の恩愛ゐ道閲も不便と思し則ち乘興ゐて岡崎へ到り種々ゐ詫給へゝ廣忠も曾祖父の仰せ默止難くと夫より諸臣を集め給ひて評議有しゐ酒井を始として言上せるゝ御父清康君不慮のゐ最期有しも全く信定殿ゞ織田家へ一味同心して虚説を言觸せし故ゐり加之ならずゐ曾祖父道閲君を欺き我君のゐ後見と稱して清康君のゐ遺領迄も掠め奪ひ剩さへ君を弑せんとしたる逆賊何ぞ生置べき謂れゐらんと時ゐ石川與七郎本多忠高の兩人進み夫のみならず信定君ゝ敵將信秀ゞ妹聖なり當國をして織田家へ屬させんとする不義無道の者なれゝ是非を論せず刑戮ゐ行ふ事宜からんとゲけれゝ廣忠汝等ゞ發言せる條道理ゐりなゐと雖も入道殿予ゐ詫給ひて信定の罪を糺さず寛くれと歎き給ふゐより之と誅するゐ忍びず且又入道殿の宣ふを用ひざれゝ禮ゐ違へり古へより仇敵ゐ對するゐ恩を以て報ずと云り況や信定逆賊なりと雖も予ゞ大叔父なれゝ暫時誅罰を見合せよと寛仁大度の仰ゐ諸臣一同平伏して終ゐ助命の沙汰ゐ及べり其後廣忠ゝ岡崎へ歸城の始末を石川四郎康繁を以て今川義元へゲ送れゝ義元大ゐ喜悦有て則ち朝比奈小隼人を名代として差越さる廣忠聞て大切の客なり迎城外迄自身出迎ひたまふゐ仍て一門譜代の面々ゐ供ゐて後見松平藏人信孝俱々ゐ出迎ひける此時内膳信定所領を取上られ一門の末席ゐ着座しけれど其形狀前ゐ異り哀果敢なき有様なり斯て小隼人ゝ書院へ通り義元の口上を述ける其趣きゝ東條左兵衛佐義照其弟東條若狭守義安兄弟の者織田方へ志ざしを通じ足下を殺害せんとせし惡人なれゝ足下人數ゞ發して攻亡すべし且又德川家人數小勢ゐて心許おく思し給へゝ東三河ゝ今川家の旗下なれゝ悉皆足下の下知ゐ應すべき旨指揮しけれゝ子細ゐしと印符を渡しけれゝ廣忠厚く謝して小隼人を饗應ける小隼人ゝ頓て暇を請て駿州へ立歸れり去程ゐ東三河なる今川家の諸士義元の不知ゐ仍て我劣らじと岡崎へ馳集るゐより廣忠人數を催され其勢千五百人幷ゐ東三河の軍兵千餘人都合二千五百餘人を引率して東條の城へ押寄聞を揚て攻掛れゝ東條兄弟も出張して挑み戰ひけるゞ酒井本多大久保榊原石川等ゝ眞先ゐ進んで攻戰ふ其鋒先鋭くして當り難く東條兄弟ゝ一先城中へ引入息繼して再び突出んと思ひ引返す處ゐ義安の舍弟義明城門を閉て入ざるゆゑ兄弟狼狽するを此方ゝ得たりと短兵急ゐ押掛り終ゐ義照を討取り舍弟若狭守義安をゝ生捕て駿州へ送りけれゝ義元之を駿府の敷田と云處ゐ押込其舍弟義明と東條の城代として差置れける時ゐ天文十二年正月ゐり此後廣忠ゝ三州苅谷の城主水野右衛門大夫忠政の女を娶り給ひて婚姻せらる是を於大の方と稱す容顔美麗ゐして性質眞實なる婦人なり此於大の方幼少の時より鳳來寺山の藥師を信仰し給ふ此翌の藥師ゝ煙霞山鳳來寺と稱し利修上人の開基ゐして元和三年修覆せらる東照宮の宮ゐり又北の堂ゝ右大將頼朝の建立ゐして奉行ゝ梶原是を勤めけるよし入口數居鴨居の間景時ゞ身の丈なりとぞ

○竹千代誕生の事

幷於大の方離別の事

斯て於大の方ゝ信心怠らず男子誕生を祈られけるゞ或夜夢中ゐ藥師の靈場ゐ到りしゐ異香四方ゐ薫じ何處ともなく八旬餘りの老僧水晶の珠數を爪操微妙の聲を發して貴婦年月我を信ずるゞ故其信心の厚きゐ愛て一人の男子を

授るなり其子大ゐ家を起すべし努聊りも疑ふ事なりれと宣ひりき消す如く失給ひしと見て愕然と夢覺たり於大の方ハ大いゐ悅び此事を語り給へバ廣忠も深く悅び夫婦待わび給ひしが幾程もおく懐妊せられ天文十二年壬寅年十二月廿六日寅の日寅の刻ゐ若君誕生在し竹千代と号されける其後或夜廣忠寢所ゐ就睡眠給ふゐ淨衣ゐ立烏帽子を着したる貴人青き松枝ゐ金の短冊を付て突然と現れけれバ廣忠ゑ覽有て植村新六郎を召彼ハ何者ゐていりなれバ此所へ來りしや仔細を尋よとの仰せよ植村畏まつて彼者ゐ向ひ其方ハ何國いりなる者なれバ御前へ案内もなく推參せしや無禮なりと咎め短冊ハ植村が請取べし疾々渡して退去せよといふを彼人大いゐ憤り植村ゐ向ひ汝ハ物を知らぬ者りな物を受取渡すゐハ定りたる法式有り何迎是と渡すべきぞと聞て新六郎大いゐ怒り其一言無禮なり定めし織田家の問者なるべし乞召捕て罪と糺さんと突然無手と組付けれバ彼人莞爾と笑ひつゝ植村と引捕へ小脇

ゐ抱へて立たる形狀ハ常人とハ見えざれバ安倍大藏進み出で禮と正して植村が麁忽の程と詫彼の短冊と受んと請バ彼の貴人のいはく汝ハ德川の老臣ゆゑ疑念ハ僅少あらされども廣忠の他渡し難くと告ると聞て廣忠ハ最も怪み給ひながら座と離れて請取給ふ時ゐ彼人告て是ハ井田八幡宮ゑ邊ゐ授け給ふ物なりとて渡され賜ふ廣忠ゑ覽有るゐ其筆跡最鮮靈ゐして一首の歌あり其歌ゐ曰

神〳〵のなりき浮世と守るうな
やぶのこゝろハ千代竹の宿

と認めあるゐを廣忠不審ゐ思され是ハ必ず當家と神の守らせ給ふゐや彼神使ゐ尋んと思給へバ愕然として夢覺たり廣忠扨ハ靈夢ゐてありけるうと思召す中夜明放れて翌日ゐ至りけるゐ其朝當國大濱稱名寺の住僧ゑ機嫌伺ひとして登城しけれバ廣忠幸ひの事なりとて前夜の夢物語りせられ其心如何と仰せけれバ住僧暫時考へ居たりしが聽て申上けるハ最も目出度吉夢なり敗の心ハ千代竹の宿とハ則ち竹千代君と神々の永く守護給ハんとの侑事なりと判じけれバ廣忠大いゐ悅喜有りて此義と譜代衆へ物語りありしがバ各是ハ正しきゑ吉夢ゐりと祝詞と申上たり廣忠男女の子六人まで擧けたまふ第一家康幼名竹千代母ハ於大の方第二家元幼名源三郎母ハ湯殿第三ハ女子ゐして荒川甲斐守頼持が室となる第四ハ女子松平上野介康高ゐ嫁す第五も女子松平與一郎忠政ゐ嫁す第六信成妾腹ゐして内藤氏と嗣内藤三左衛門と稱す斯て天文十三年六月中旬廣忠の舅水野忠政が舍弟下野守信元より水野左近と使者として申越けるハ信元多年今川家ゐ隨身する處近來義元の會釋宜りらず不法の事共之有依て自今織田家へ隨身せんとす然るゐ德川殿とハ因緣あるゐ依て今川家へゑ隨身ハ信元甚だ心痛せり願くハ義元と絶交して織田家へ某しと俱ゐゑ隨身の思召を立られおバ信元宜敢ゑ取成なすべしと申送る廣忠是と聞て意決したまハざれバ確と返答せず月日を重ね給ふゐ織田信秀頻りゐ水野方へ催促す

之に依て信元も止事を得ず又々老臣高木主水清秀を以て是非織田へ一味有べし若又彼同心之なきに於ては好親を絶一戰に及ばんとす然せざれば信秀へ對し申譯立ず依て有無の返答承まはり度と申送りければ廣忠聞召し退て返答に及ぶべしとて主水を返され其後安倍酒井本多大久保石川榊原等を召集め評議せられしに面々顔を見合せ是一大事なり迚誰も發言する者もあらざりき此時安部大藏進み出て若君彼出生といひ亦ぐら彼外戚の水野に彼親みあつて織田へ彼一味の事は武門の本意に非ず抑も當家先年内膳信定殿が逆意に因て既に衰微に及びし處今川義元舊怨と捨彼當家へ助力ありし故再び西三河半國の領主と成せ給へなり皆是義元の恩に出る處たり何ぞ武門の身として内緣に引れ信義を忘却し給へべきや且又信秀は尾州半國の領主なり今川は駿遠兩州の大領主近國無双の猛將よして甲州の武田相州の北條等まで義元の勇威に恐怖する程なれば信秀に彼一味ある時は義元大軍を率ゐて當國へ乱入する事必定あり然る時は德川家の滅亡疑ひなしと憚る所なく理を盡して諫めければ廣忠聞て汝が申處實に然り廣忠其意に決すべしと有て夫より内室於大の方へ委細物語られ義に叛らざるは武門の習慣なれば是非に及ばず今彼身を離緣すれば父兄の許へ立歸りて云々にせられよと仰ければ於大の方之を聞て幼兒を抱き在るもあられぬ思ひして深く悲歎に沈み給へども是非もあらねば幼兒を殘し名殘惜くも凄々と乘輿に召されて岡崎城を出給へば鎌田惣八郎安倍四郎兵衛の兩人を始め其外大勢彼供して苅谷の境迄送り參せけるに於大の方の仰として乘輿を立させられ鎌田安倍の兩人に面々是迄送り來る事大儀なり併し此處よりは下野守殿の領分なれば自ら思ふ仔細も有べ皆々岡崎へ歸られよとありしかば兩人畏つて仰ぜられ共主命なれば苅谷迄彼供仕つるべしと申上れば於大の方重て下野守殿は性質短慮なれば面々苅谷迄送り來らんには難儀に逢も計り難し左あらば廣忠殿の彼怒りも強く自ら再び岡崎へ歸る事成難く殊には竹千代に對面叶ふまじ依て各此處より歸られよと涙を流して仰ければ鎌田安倍も扨は彼夫婦の彼計略にて信元殿の心を和げ給へんとの彼離別なるべしと思ひ畏り奉つると安倍四郎兵衛鎌田は私語苅谷領の百姓十四五人を呼出して仔細を申聞せ輿を渡し置立歸る形狀にて片邊の林に潜伏して事の樣子を窺ひける百姓共は急に此由を苅谷へ注進せしかば間もなく信元の老臣高木主水清秀百五六十人を引率して馳來り又水野左近も六七十人にて飛が如くに馳來り馬より下て乘輿の前に蹲踞岡崎より送りの者共は如何致しぬ哉と伺ひける於大の方然は送りの者共は自らを此處に捨置て歸りしと宣ひしかば开は口惜き事かな某等遲參しける故討洩したり未だ遠くは隔るまじ速に追駈よと從者に下知して既に走行んとしければ於大の方聲を懸岡崎の者共最早城下に歸着しつらん追懸るとも無益なるぞと申されけるに兩人下野守殿の彼指揮として送りの者共一人も殘さず討取との嚴命あれば斯は迫駈んと存せしなり然ども最早是非もなき次第なりとて頓て乘輿を守護苅谷へとこそ歸りけれ斯て於大の方は叔父信元を種々樣々に諫めしに下野守是を用ひざるのみならず大いに怒りて於大の方を自分の旗本たる尾州白河久松佐渡守定俊へ再緣せしめ抑久松氏は菅家にして其元は肥前守信直其子次郎左衛門定吉其子今の佐渡守定俊なり然るに於大の方は佐渡守方に子を數多設く嫡女は松平玄蕃允家清に嫁す其次は松平因幡守康元三は松平隱岐守定勝伏見の城代となる四は松平源三郎康俊人質となりて今川家へ到る後又甲州へ赴く五は女子にて松平丹波守康長に嫁す六は助之丞定重七は十郎左衛門吉繼なり斯て天文十四年三月十九日廣忠は戸田彈正頼光が女を娶給ふ此祝として近臣等種々樣々の奇藝を顯す中に岩松八彌（鎌田の末葉なり）は一眼なれども近代無双の剛勇士にて無骨者なれば遊藝などは曾て知らざれば人皆是と嘲り笑へり八彌如何なる心

意わや其翌廿日わ至り廣忠手水わ立給ふ所と覗ひ人なきを幸ひ村正の脇差を扳持後より突んとするわ刀の光り閃きけるゆゑ廣忠驚き忽ち身を飜し給へゞ八彌周章て廣忠の殿と突捨遙う彼方へ逃行を廣忠屹度見て不屈き至極の下郎ゞ擧動其儘わ捨置べきやと追駈んとし給へども痛傷わ歩行叶ハざるわゞ誰う在る狼藉者と組留よと叫び給へど折節近習も居合さねゞ八彌ハ終わ俘殿を逃れ番所〳〵わて咎むれゞ只急用とのみ答つゝ遂わ大手の門を過るわ向ふより植村新六郎家次番代りとて登城しけるゞ八彌の慌だしく駈來るを見て聲を掛岩松殿何方へ參らるゝやと尋ぬるわ八彌ハ聞敢ず急の俘使ひなりと答へけるゞ何とおく其体騒々しく殊わ脇差のみおれゞ植村怪みつゝ何程火急の俘用なりとも武士の身として刀を帯せざるハ何事あるやと詰る折しも城中より狼藉者逃さじと追々馳來る形狀わ新六郎偖ハ不埒を働きて逃來りしわ相違なし迚引捕へんとするを八彌ハ最早遁るゝわ道なしと覺悟を極め新六郎わ飛掛り無手と組付ゞ此方も透さず揉合しゞ互わ名を得し大力なれゞ暫時勝負も見えざりしゞ押合機會わ兩人足を踏外し組合し儘眞逆倒わ堀の中へ落入けるゞ幸ひして空堀なれゞ八彌ハ新六郎ゞ下手ゑおりしと是究竟と已わ刺殺さんとしける處を新六郎ハ八彌ゞ腕と確り握りて動せず其時追駈來りし者共二人ゞ勇猛わ氣慮しけん橋の上わて徒わ見物してぞ居たりける然るわ三木の信孝登城の折柄此躰を見て大いわ驚き從者わ持せし鎗を取て既わ八彌を突留んと心ハ焦立ども植村わ傷負せしと暫時猶豫する處新六郎聲を懸此奴ハ重大なる罪人なれゞ貴殿心を勞し給ハゞ我と倶わ突給へと忠義の壯士ゞ言ゞわ信孝悅び遂わ八彌を突留けり斯て八彌ゞ狼藉を糺明するわ全く乱心せし者と判然もれども主君へ對して無道の擧動をなせし故遂わ同人ゞ長男も誅せられ六歳わなりし孫までも既わ刑せらるべきを廣忠の仰わ集ハ幼兒わて東西をも辨へざれゞ赦し遣すべしとて武士と止めて幸若小太郎と云舞太夫の弟子わ下されしとぞ

○信定忠尚徳川を叛き織田へ歸する事
　幷信孝驕慢の心を起す事

斯て徳川家の老臣安倍大藏少輔正就酒井雅樂助正親石川安藝守清兼等ハ古老の者故自然其權勢高く又内膳信定ハ降參の後ハ人々信定ゞ邪心を忌嫌ひ交際者もおく殊わ見る影もなき形狀なれゞ信定口惜き事わ思ひ又も不良の心を起し内々織田家へ志ざしと通じ其上譜代の者を語らハんと覗ひ酒井將監忠尚ころ其心あるべしと推し種々樣々わ將監を勸めけるわ忠尚豫々心中わ我こそ家嫡なれゞ執權をも勤べきの處正親ゑ奪れし事心外なりと思ひ居し故早速信定わ一味同心して大原左近右衛門今村傳四郎等を招きて將監曰く世の風説わ我等酒井の家嫡なれども器量なき者おりとて雅樂助わ權勢を奪れ涙ゞ下知を受て尻舞するおゞゝ聞及び口惜き事心根わ徹す依て當家を立去んと存るなりと吐きけれゞ大原今村口を揃へ何樣武門の意地左こそ有べし併しながら主君へ一應申上其上わて兎も角も訃るべし無沙汰わて立退くハ不忠なり万一俘裁許わらざるわ於てハ我々も共わ立退べしと云けれゞ將監も其理わ服し信定へも相談なし頓て顯書を認め差出ける其文わ曰正親清兼等權威ゑ募り我意を恣ゝわして上を蔑ろわし剩さへ某し等へも無禮少らず依て望等を急度戒め給ハずんゞ諸士恨みを含み敵と成ハ必定なり此事努々疑ひ給ハず速りわ俘處置之あるべし依て諫狀と捧ぐる者なりと認め差出せしゝゞ大久保新八郎成瀬八郎等則ち俘前へ差出も廣忠披見せられ是全く正親ゞ權勢強きを嫉妬ての爲所ならんと思召忠尚を召出し其方ハ條一理有り去乍ら臣たる者ハ私の宿意と存せず其主わ仕るを忠とハ云なり廣忠能わ扱ひ取すべしと仰聞られしわ忠尚少しも承諾せず遂わ信定始酒井大原今村等主君わ叛き白畫岡崎を立退織田方成上和田の城主松平忠倫わ附屬す是わ依て織田備後守信秀ハ時節到來せりと大わ悅び三州へ乱入して安

祥の城を攻取ける其時信秀舎弟信康を招きて曰く我此機ゐ乘じて岡崎をも攻取んと謀ると雖も廣忠ゞ武威未だ衰へず日を經て彼城を圍めゞ今川義元大軍ゐて後詰する事必定ゐり依てゆ邊此城ゐ殘り籠城すべし我一度尾州へ歸陣なすゐよりゆ邊深く思慮して德川の黨らを味方ゐ引入北動靜を謀り早々尾州へ注進あるべし然らゞ我又出張して西三河を切取べしと此處ゐ謀略を評し要害最も嚴重ゐ擣へさせ信秀ゐ尾州へ立歸れり此時德川廣忠ゐ八彌ゞ突し疵未だ平癒ならざれゞ政事万端三木の松平藏人信孝ゐ任せ給ひ自分ゐ奥殿ゐのみ閉居せられて出馬の沙汰もなければ信孝之を能事ゐ思ひ次第ゐ增長して諸事自己ゞ儘よし當主廣忠を岡崎へ歸住せしめしも皆我大功ゐ依てなりとて自ら慢心して不敵の擧動夥多しく依て安倍大藏少輔是を歎き斯の如くゐてゐ當家再び危しと度々信孝を諫めけれども信孝嘗て承諾せず剩さへ安倍大藏を忌事前日ゐ百倍しけれゞ大藏ゐ深く患ひ此事疾くも廣忠へ告奉りて信孝を除うん者と心を勞すれども病中閉居せられしゐゞ是非なく〳〵も捨置けり

○忠倫盲人を以て間者となる事

并平三郎忠倫を害する事

去程ゐ廣忠ゐ今川義元の助力ゐ依て岡崎へ安住せし恩義を忘却せざる爲年毎駿河へゆ越ありて新暦の賀義と祝し貢物と贈らるゝゐ今年ゐ既ゐ月迫ゐ及ぶと雖もゆ惱悉さるゐより藏人信孝ゐ招き給ひて事拵を示され翌天文十五年正月信孝と代參として駿州今川家へ遣ゐさる然るゐ信孝ゐ密ゐ德川家を横領するの逆意あれゞ其使者こそ僥倖あれと大ゐ悅びつゝ駿州へ下向なしける跡ゐて安倍大藏少輔酒井雅樂助石川安藝守等ゐ此時こそと即時ゐ人數を催して三木へ押寄城中ゐ殘り居る者共を皆悉く追退其城を奪ひしゐゞ留守居の者共追々駿州へ逃行主人信孝ゐ斯と告れゞ藏人大ゐ驚き歎き義元へ此事を訴へ出るゐ義元之を聞て不審晴やらねゞ早速三州へ使者を馳て事の趣きを聞するゐ德川家ゐてゐ委細落もなく書面ゐ認めて返答しけるゐど義元信孝ゞ遊意を知て少しも關係ざるゐより信孝是非ゐ及ゞずと思ひ駿州を逃れ出で三州上和田ゐ到り松平三左衛門忠倫ゐ屬しける是ゐ依て忠倫即時ゐ尾州へ注進しけれゞ信秀大ゐ悅び早速加勢の兵の遣して三木の番兵等を追立城を取返して藏人信孝を入置たり廣忠斯と聞より自ら出馬して信孝を打平げんと矢竹ゐ逸り給ふ故ゆ惱重らせ給ひけれゞ安倍酒井石川等の老臣大いゐ憂ひ斯の如くゐてゐ平癒覺束なしと種々評議して諸藝ゐ達したる者を求めて主君の鬱を散せしめんと其人を尋ぬるを忠倫疾くも傳へ聞是屈竟の事なりと我家人の悴ゐ盲人の有ける〻按摩の上手ゐて殊ゐ弁舌能話などゐ妙を得たる者ゐれゞ則ち是ゐ謀事を示し間者として岡崎へ遣しけるゐ此盲人廣忠のゆ慰みゐとて諸藝を撰してゆ意ゐ入るゝゐ殊の外廣忠のゆ心ゐ適ひ晝夜側を去ずゆ機嫌を伺ひける依て自己ゞ聞得たる事ども一も漏さず皆上和田へ告たりける是ゐ因て忠倫ゐ岡崎の樣子一として知らずと云事なし斯る有樣なれゞ松平權之助を始めとして皆廣忠ゐ背きけるゐぞ廣忠遺憾ゐ思し居給ひしゞ或時庭へ出られし折しも筧平三郎重忠只一人ゆ側ゐゐありしゐぞ廣忠平三郎ゐ對ひ汝ゐ依頼あり餘の義ゐあらず上和田の忠倫逆心あるゐ依て汝彼を害し予の鬱憤を晴し呉よと宣ひけれゞ重忠其心を推し君命畏まり奉つる併し當城内ゐ忠倫ゞ間者徘徊致し居れゞ聊ゐゆ油斷あるべからずと申上けれゞ廣忠予も之を知得るゐりとて刀を重忠ゐ賜り私語給ひて汝明日云々せよと牒し合せ素知ぬ顔ゐて過給ひ翌日諸臣列座の折拵廣忠平三郎ゐ對ひ上和田の忠倫我ゐ背きて織田家へ一味し剩さへ當家を押領せんと逆意を企るゐより我是を誅せんと思へど病ゐ冒され果す能ず然ゞ忠倫ゞ罪を許し和睦せんとす汝ゐ幼少より忠倫と竹馬の友なれゞ此事忠倫ゐ說示せと仰らるゝゐ筧ゐ莞爾と笑ひ是ゐ最安き仰なれ共忠倫ゐ忠義の武士なり畢竟君ゐ背きける

も古老安倍酒井本多抔忠倫を譏言せし故なるべし依て老臣三人へ切腹を渉中付あらゞ忠倫ハ招ゞずとも速りゐ君へ隨ひゝと言上しけれゞ廣忠大ゐ怒り給ひ汝不埒あり畢竟忠倫と交際深きゞ故彼ゐ荷擔して我古老たる忠臣をも殺させ廣忠を亡す所存ならんと渉氣色荒く宣へゞ平三郎ハ大ゐ笑ひ愚將の怒りハ小兒の如しと過言するとゞ聞兼て本多平八郎進み出で既ゐ平三郎を害せんとするゐど廣忠聲悪鳥獸の如き者を成敗せんハ刀の穢なれゞ赤裸ゐして門前より追拂へとの仰ゐ忠高猫を掴みし如く平三郎ゞ襟元を引掴んで門前へ連行筈杖放ゐなしけれゞ平三郎ハ面目を失ひ口惜き体ゐて悽々と上和田ゐ赴き案内を乞けるゐ忠倫早速對面して渉邊ゞ來る事の遲きを待兼たり我其許の忠志ハ疾より知りと云ゐど覓大いゐ慇きたる形狀ゐて其仔細を尋ねけるゐ忠倫曰先達て當方より盲人を間者として岡崎へ遣し置たれゞ彼より一々通ずるゐりと語るを聞て平三郎偖々夫ハ妙計なり斯謀らるゝとも知らずして渉邊を敵とする廣忠の愚さよと冷笑ひつゝ此上ハ我等渉邊ゐ隨ひ俱ゐ密事を談ずべしと云ゞ忠倫大ゐ歡喜夫より後ハ心を免し俱ゐ密事を語ひけるゞ頃しも天文十六年七月廿八日の夜忠倫ハ酒宴を催し醉ゐ乘じて前後も知らず熟睡なせし樣子を窺ひ覓平三郎ハ天の與へと大ゐ歡喜密ゐ忠倫ゞ寢所へ忍び入主君より給ひたる信國の一刀を袖ゐし突然忠倫ゞ頭上を目掛て蹴散せゞ忠倫驚き目を覺し何者なるやと聲を立るを平三郎ハ聞も敢ず何者なりとハ誰事ど覓平三郎主君の命ゐ因て奸賊を誅戮す覺期せよと云つゝも切て掛るゐ忠倫ハ寢耳ゐ水の譬の如く周章狼狽逃んとすれど其寸暇さへあらざれゞ枕刀を追取らんと爲を透もあらせず切付れゞ過たずして忠倫ゞ肩先掛て乳の下迄深くも斬込業物ゐ何りハ以て溜るべき二言となくて息絶たり此物音を聞付て家臣追々駈來樣子なれゞ平三郎手疾くも忠倫ゞ首を刎片手ゐ携へ閃りと庭へ飛下て高塀と乘越んとする機ゐ誤て外なる空堀へ落入たり然るゐ皆々松明を振照し口々ゐ狼藉者よ夫捕押へよと云つゝ追駈來るゐど平三郎ハ最早此處ゐて命を絶うと思ひける其處ゐ大の男飛來りて平三郎を懐起しけるゐ此方ハ再び駭き何者なるやと聲を掛るゐ折しも雲間を漏出る月ゐ二人ハ顔見合せ其方ハ舍弟平十郎ゐ兄上渉怪我ハなりうしうと聞て平三郎ハ蘇生せし心地して別ゐ怪我ハせざれども此高塀より轉び落ち打身の痛みゐ歩行難しと兄の詞ゐ平十郎开ハ氣遣し給ふな迚兄を脊負て飛ゞ如くゐ此處を逃れ岡崎城へと立踏れり斯て平三郎ハ忠倫を打取しとて其首級を廣忠へ見覽ゐ供けれゞ廣忠大ゐ悅び給ひ其賞として羽栗と云る百貫の地を下し賜ひ併て感狀を添られける其文ゐ曰

今度三左衛門忠倫を打取し功比類無之仍て廣忠其忠を賞し汝ゞ子孫ゐ至迄百貫の地を爲報恩遣し置者也

天文十六年八月廿日　　德川廣忠印

覓平三郎殿へ

其時廣忠ハ本多忠高を召れ彼間者たる盲人を是へ引立來るべしと仰せゐ忠高畏みて縛め置し上和田ゞ間者の盲人を渉前ゐ引据しゃゞ廣忠盲人ゐ向ひ汝盲人の身分として大膽ゐも忠倫と謀り能も我をゞ詐謀たり其返報ゐ汝ゞ首を刎て恨を晴さんと終ゐ誅戮ゐ行とる

○德川勢山中の城を乘取事

并廣忠今川家へ加勢を頼む事

却説山中の城主松平權兵衛ハ兄三左衛門忠倫ゞ誅せられしと聞舍弟左近同清藏同三藏を招き寄て兄忠倫ゞ復讐となさん策略を談合する處へ酒井石川大久保等各三百餘人の軍兵を從へ不意ゐ攻寄けるゐ城中未だ軍備整とざれゞ防戰するの力もおく夜ゐ入るを待受主從諸俱城を逃れ何處ともなく落延けるゐど易々城を乘取ける然るゐ安倍大藏ゞ尾州へ遣し置し間者馳歸りて忠倫ゞ兄弟等織田信秀ゐ加勢を請ひ今ゐも織田方の軍勢三州へ乱入せんと注進しけれゞ廣忠驚き給ひ諸臣を集めて評定せらるゝゐ

石川清兼進み出味方の小勢を以て大敵と戰いん事最も危し依て今川家へ加勢を乞頼み有て然べしと云けれゞ諸臣其意ゐ同じけるゐゑ石川清兼を以て今川家へ加勢の事とゆ入れゝゞ義元諸臣を集て評定有ゐ雪齋當時の人心笑ひの中ゐ針を含むゞ如くなれゞ蹈人を乞所望の上よて人數を送り給へとゆける義元實ゐもと思し石川を呼出して德川家と疑ふゐいゐあらざれども當時德川殿の乞一族悉皆く織田方へ心を寄ると承まいる是ゐ依て當家の諸將不得心あれゞ人質を出さるべし然る上い即時ゐ人數を出し與ふべしと返答し給ふ清兼其趣きを聞急ぎ三州へ歸りて此由を廣忠へ言上しけれゞ則ち竹千代を駿州へ送り給ふべきゐ決す此君未だ六歳なり後家康と号し給ふ然ゞ駿州へ送らるゝゐ小性夥多供しけるゞ就中阿部德千代い別て寵愛深く依て相興ゐて越給ふと德千代い後年善左衞門正勝と名乗て從五位下伊豫守ゐ叙任し備後國福山の城主と成て十万石を領す伊豫守の先祖なり其外石川與七郎（後伯耆守數正といふ）平岡七之助（後主計頭親吉といふ）榊原平七郎（後式部大輔康政といふ）阿部新四郎村越平三郎江原孫三郎天野三之助等なり附人ゐい金田惣八郎政貞安倍四郎兵衞忠定松平與一郎忠政金田與惣右衞門政房以下二十八人雜兵二百餘人天文十六年九月二日岡崎を發し給ふ廣忠も乞座を立て送り給ふ是則ち父子一世の別れとゐりゐける爰ゐ三州田原の城主戸田彈正頼光と云い廣忠の舅ゐて竹千代よい繼母の外祖父なり此彈正ゞ子息五郎綱光と云者若年の時より大膽不敵ゐして强慾なれゞ父彈正是を怒り遂ゐ勘當なしけるゞ夫より五郎い尾州へ立越織田家の老臣平手將監を頼み食客して月日を送り居ける處ゐ信秀ゞ間者三州より立歸りて竹千代を人質として今川家へ送る由注進しけるゐゑ信秀聞て大ゐ驚き斯てい德川駿州より加勢を請ゐるべし然る時い大軍を以て予ゐ敵するゐ相違なしと即時ゐ諸臣を集めて委細を述彼人質たる竹千代と當方へ奪ひ取る策略こそ最もよし汝等是を計ふべしとの仰ゐ岩室長門守を始め林佐渡守柴田權兵衞等各之を良策なりと云と平手將監聞敢ず各〳〵の計策甚だ非なり若し其言の如くならゞ德川の者危急ゐ望む時い必ずしも竹千代を差殺しても此方へい渡すまじ斯る場合ゐ至りなゞ廣忠益〻怒りゐ堪ず返て大事こそ出來せん某し思ふ仔細もあれゞ各暫時待給へとて急ぎ退出して私邸ゑ歸り戸田五郎を招きて此度德川より今川へ竹千代を人質として送る由聞及べり是いい當家へ敵せん所存なれども竹千代さへ奪ひ取ゞ此患ひ除るべし依て乞邊ゞ父彈正い德川ゐ好みあるゐより乞邊謀計を廻らし彼竹千代と奪取なゞ三州半國を遣もとの主命なれゞ何卒盡力せられよと云ゞ元來强慾非道の五郎あれゞ大ゐ悦び一儀ゐ及ゞず承知なし我三州へ赴き父彈正を說必ず此事果すべしといい云者の衣裳迎あらざれゞ何卒此義を希度と云ゐ將監心得て三十貫文を遣しけれゞ五郎い早速衣類其他の物を調へ身の廻りを美々しく粧ひ飾て供廻り迄荐へ三州へ到り父彈正ゐ對面せんと案内を請ける故彈正取敢ず取次の者を出し悴五郎ゞ形狀ゐゑ問けるゐ其形最立派なりとゆけれゞ彈正も性質强慾の者なれゞ能き手段も有べしとて早速對面するゐゑ五郎得たりと密ゐ悦び我勘當を受し後織田家ゐ仕へて斯〻の役を勤め今い乞覽の仕合なり然るゐ今度竹千代君を今川家へ人質として遣さる由是を奪ひ取時い信秀殿より東三河半國い我々父子へ下賜ふと其言虛言取交て語るを慾ゐ扱目ゐき戸田彈正い悴ゞ言葉を實として大ゐ悦び然らゞ云々ゐ計ふべしと其惡策を示し合せり

○戸田父子竹千代を奪ふ事

幷金田安倍勇戰の事

斯て竹千代三州西郷迄至らせたまふ處ゐ戸田五郎綱光乞送りとして此處へ參上仕つる迎金田惣八郎ゐ對面なし幼君是より陸地を經て駿河國迄乞越あらん事聊ゐ障あり其仔細い陸地ゐい織田方へ與力の輩らの城多くして容易い通しゆまじ依て乞船ゐて乞渡海然るべしとゆけるゐゑ

各評議ゐ暫し時を移す折柄若君の迎ひとして今川家の老臣飯尾豊前守が弟勘助五六十人計りゐて此處へ來る此時道筋い愈〳〵五郎が中旨ゐ任せ伊船の方宜敷らんと頓て濱邊の方へ赴きけるゐ海上波荒く漁船一艘だも見えざるゐぞ若や難風の起るならんゃと又々此處ゐ評議を遂舊の處へ引返し彼是時刻を延せし中戸田五郎い何處へ行しや更ゐ影だゐ見ねざる故渡海の船を周旋ゐ行たるならんと待合す處へ戸田彈正の長臣橋本大膳來り人々を見て不審み何迎此處へ來り給ふやと尋るゐ各云々の事ゐて戸田五郎と待合すと聞て大膳大いゐ驚き五郎い主人彈正が子息なれども平素行狀善らず故ゐ當時勘當の身の上なり元來惡逆の五郎あれば必定織田家の者と心を合せ若君を奪ひ取尾州へ送りて恩賞を貪らんとの心底あるべし然ば此處ゐ伊出ありてい若君の伊身危し暫時我主人方ゐ伊休憩せられて動靜を窺ひたまへと告るを聞て皆々驚き扨い戸田殿い此事を知給いずやと色を失ふ其中ゐも飯尾勘助進み出で斯てい片時も安堵し難し五郎が謀計ゐ掛らぬ中疾々此處を立退こそ妙計ならん遲滯する程不覺の基ゐ疾其用意をなし給へと云ゐ諸人同意なし然らば片時も急ぐべしと支度なさんず折しもあれ處々より鯨波の聲を發し數百人の兵士出來る中ゐ大將と覺しき者其先ゐ進み戸田綱光織田家へ同心して德川殿の幼息を奪取らんと此處へ待掛たり速ゐ渡すべしと大音上ゐ呼はりければ金田物八郎大いゐ怒り憎き五郎が擧動かな不義を知らざる畜生武士刀の穢と思へども汝が首と打て若君の伊前ゐ備へん覺期をせよと云ながら忠宗の刀と眞向ゐ振翳し其一文字ゐ切て掛れば續いて安倍四郎兵衛松平與一郎金田與物左衛門以下の者共も太刀扱連て打て掛れば此處彼處より織田の軍勢宛然潮の湧が如く出來りつゝ竹千代と奪ひ取らんと追圍繞むを安倍忠定い鎗追採て躍り出只一人も餘さじと突立〳〵忽ち六七人を突倒し勇を奮て戰ひければ織田家の軍兵驚き周章後をも見ずして逃散ける此時五郎が從卒戸田五左衛門取て返し乘輿を奪ひ立退んとする形狀を見て四郎兵衛忠定大ゐ驚き驚破曲者逃さじと鎗と捻て突掛る其勢ひ宛然猛虎の荒たる如く流石の五左衛門も忠定が猛威ゐ敵せず狼狽して一目散ゐ逃行を逃しいせじと追行たり其邊と見て濱崎五郎兵衛八十人を率ゐて馳來り乘輿と奪ひ取んとしける處へ上田宗慶取て返し必死となつて戰ひければ敵兵右往左往ゐ散乱しける斯る處へ綱光が家士渡邊平馬十五六騎ゐて掛來り輿を奪ひて去らんとするゐぞ松平與一郎三間柄の鎗を芦の穂の如く打振敵兵の中へ駈入つ火花を散し戰ひけるを平馬い此機と失いじと輿を奪いんとなしければ守護する小性の面々刀を扱連平馬を目掛て斬て掛れば平馬も是ゐ當惑して須臾躊躇其處へ與一郎い朱ゐ染て馳戻り平馬を目懸て突掛るゐぞ平馬も透さず懸合せ戰ひけるが與一郎い先刻より戰ひ勞れし其上ゐ尙も數ケ處の負傷ゐ堪兼平馬が爲ゐ鎗を落されァハヤ太刀と拔んとしけるを平馬い透さず突掛るゐ與一郎い身と捻り平馬が鎗と確と捕へ爭ひながらも動せず折柄安倍四郎兵衛馳來りつゝ横合より平馬を望んで扱打ゐ二ッゐあれと斬倒せり此時又も五郎綱光馳來り既ゐ輿を奪いんともるを飯尾勘助馳來り長刀を水車の如く打振戸田が兵士と六七人前後左右へ薙倒せば綱光怒て鎗取直し突て掛るを飯尾勘助心得たりと引外し火花を散して戰ひけるが五郎い焦て飯尾が長刀ガラリと計りゐ卷落し透間を得たりと突掛るを勘助閃りと身を返すゐ誤ちたりけん五郎が鎗脇腹へグサと計りゐ突貫けるゐ勘助撓まず其鎗を扱んとするゐ五郎い透さず英と聲掛突倒し遂ゐ飯尾の首を刎興と奪ひて去らんとすると金田政貞馳來り此形狀ゐ駭きて一世の浮沈此時なりと五郎を相手ゐ必死ゐ為りて戰ひけるが互ひゐ劣らぬ勇士なれば暫時勝負も見えざりけり金田い鎗を投捨て五郎ゐ無手と組付遂ゐ五郎を組敷て既ゐ首を討んとしけるゐ小島二郎三郎突然金田が脇腹へ一太刀グサト刺貫す刺れながらも政貞い小嶋

を陣晩で小賢き挙動なりと大よ怒り二郎三郎の首筋掴で遙彼方へ投付たり北斎覘つて戸田五郎刎返しつゝ飛起イ遂ゐ金田を取討たり斯の如くゐ騒動して岡崎勢ハ必死と盡せど敵兵勢ひ盛んなれバ味方ハ過半討死せり斯る處へ彈正頼光駆多の勢を引率して馳來り五郎の軍卒を追拂ひ乗興を鬱固し石川與七郎平岡七之助同助右衛門阿部兄弟江原村越天野等を伴ひ歸らんとす時ゐ金田與物右衛門駈來りて聲を掛戸田氏如何討ひ給よと尋るゐ彈正某し徳川家ゐ好身あれバ聊ゐ鹿略ゐ仕つらず依て頼光ゐ任せたまへと云に金田ハ實ゐもと同意し其儘竹千代を船ゐ召させ遙の沖へ漕出す此時森新助金田ゐ呼さ彈正とても油断ハならじと云れて金田ハ左こそと思ひ我誤てりと心ゐ惑ひ沖を遙ゐ見渡せバ何時の間ゐやら鬱固の船悉皆く旗と押立或ひハ吹流しを風よ翻へし弓鉄砲を備へたれバ與物右衛門ハ再び慈き扨ハ戸田の計策ゐ懸りしりと切歯となして憤れど最早許衛あらざれバ忍びて扣へ居る中ゐ船ハ

然田よ着岸なしたり然るゐ安倍四郎兵衛松平與一郎等ハ戸田五左衛門渡邊平馬等を討取り駈戻り見れバ是ハ开も如何ゐ乗與ハ更なり供奉の者まで居らざれバ是ハ訝しと處の者ゐ仔細を問バ是々なりと語りけるゐゞ兩人大いゐ驚き沖を陣晩で茫然たりしゞ軈て心を取起し一度岡崎へ立歸り此趣きと言上せんと岡崎指て立戻れり

○織田今川小豆坂ゐて合戦の事

幷織田敗軍の事

復説織田信秀ハ竹千代と奪取て限りなく悦び熱田の神宮司加藤圖書ゐ預け嚴重ゐ鬱固を付置けるゞ夫ゐ引替金田政房撫見坂よて戸田彈正の罠よ掛り若君と欺き奪れし口惜さゐ什麼ゐもして取返さんと逸る心と顔色ゐも出さず戸田彈正ゐ隨ひ居ける然るゐ同年十二月下旬雪夜を幸ひ竹千代君と奪返さんと深更の頃簑笠ゐ身を纏ひ庭の高塀と乗越裡の樣子と窺よゐ五郎ゞ聲として鬱固の者と雑談なす形勢なれバ是ハ折悪し見咎られてハ一大事と傍の松

枝ゐ身と隠し時刻遅しと待中ゐ頻りゐ積る白雪ゐ肌さへ凍る思ひして漸次よ生躰を失よ如く其苦さも伊主の爲と一人咄ちて居たりけるゞ稍丑滿過る頃ゐ至り蕭索として物音なし是上首尾と彼松枝を下んとせしゐ先刻よりの冷たさゐ手足覺えず嘶と落る其音ゐ戸田五郎ハ目を覺し障子引明雪の光りゐ金田と見認すハ曲者忍び入たり皆一同起出よと呼ハる聲ゐ與物右衛門も最早遁ぬ所なりと覺悟を極めて大音上金田政房今宵ゐ迫り若君と奪ひゐ來れり若汝等妨げなさバ立處ゐ命と失ふ其處退ずやと云つゝも輿を目懸て蒐入る樣子ゐ五郎ハ是を冷笑ひ飛で火ゐ入夏の虫とハ汝が如きを云なるべしと云さま一刀拔放して切付れバ此方も得たりと切結び火花と散して戰ひしゞ軈て双方無手と組で爭ふ機會よ據より下へ轉び落ると鬱固の者共大勢折重り終ゐ金田と討取翌日早々此事と信秀へ注進しけれバ備後守ハ大に悦び平手將監を召て五郎ゐ恩賞を與んと仰せけれバ將監曰く元來戸田五郎ハ貪慾非道の

白痴ゐて慾の爲ゐハ主家さへ亡す程の奴よして禽獸ゐも劣りし者故永く當家ゐ止め置バ後よハ返て禍ひの根ともなる事必定なり依て速を誅戮して徳川家へ送り給ハゝ其義と感じて必定味方ゐ來るべし是偏ゐ不義無道を戒め敵と味方ゐ轉ずるの謀計ゐりと理を盡して諫めけれバ信秀須臾考へ汝ゞヤ處道理なれども功有者と無下ゐ殺害爲時ハ後日我命を信ずる者あるまじ依て先仮ゐ五郎ゐ褒美と與へ彼ゞ怠りを窺ひ罪よ落し首討て徳川家へ送るこそ一計ならんとありけれバ將監も其意ゐ從ひたり然るゐ信秀ゞ近臣の中誰ゐ之と聞密ゐ五郎ゐ告しゝバ五郎大ゐ驚き急ぎ尾州と逃返り父彈正ゞ許ゐ暫時潜みて日を送れり斯て平手將監ハ竹千代君と勸り慰め敵を計るの策略を廻らし給へと主君信秀へ勸むるゐゞ信秀さこそと鬱固の者ゐ指揮して竹千代と勸ちせ家臣林權内を使者として岡崎城へ遣し此度戸田父子ゞ盡力よて冷嫡子竹千代殿を預り養育爲す處頗る壯健なり依てヤ入る事別義ならず既ゐ當家

徳川殿と多年仇と結び両家の輩ら戰場ゐ命を落す事幾許なるや擧て算へ難し右ゐ付竹千代殿を當方へ預りたり是偏ゐ織田徳川和順すべき時節ならんと存じゝ然れゞ両家和睦して今川家と交りを絶給ゝゞ速りゐ竹千代殿を歸國なさしむべし若又此儀ゆ同意なくゞ是非ゐ及ばず竹千代殿の命を給ゝるべし斯の如くある時ゝ信秀國中の軍勢を催し三州へ乱入し両家の運と極めんとす此儀神速ゐゆ返答有べしとゆ送りけれゞ廣忠病中ながら之を聞給ひて尾州の使者櫛内を於前へ召出され此度信秀殿愚息竹千代と奪ひ人質とせられゝ事心得難し加之ならず愚息を止め置て父子の情を發させ廣忠へも降參せよとの口上なれども是武門の恥辱ゐして眞ょ以て採用致し難し當家代々織田家と弓箭を爭ふ事既ゐ久し然れども當家の微勢と以て織田家の大軍と敗る事屢々あり且又廣忠當城ゐ斯安住するも全く今川ゞ助力ょ依てなり俚諺ゐ曰義と見てせざるゝ勇なきなりと何ぞ一人の愚息ゐ替て交親深き義元ゐ背くべきや竹千代ゞ存亡ゝ信秀殿の心底ゐ任す又織田殿領國の軍兵を發して當國へ乱入あらん事ゝ廣忠最も望む處ゐり其時てそゝ相互ひゐ智勇を競ふて花々敷合戰ゐすゝ武門の名譽ゆ邊鄙國の上信秀殿へ通達せられよと返答ありしゝゞ林櫛内委細畏み暇を告早々尾州へ立歸り委細演說しけれゞ信秀大ゐ怒り其意こそ面白し速りゐ兵と起し岡崎址と踏破ると勢ひ込で總勢凡八千餘人と相催しける其沙汰遠近ゐ隱れなけれゞ今川義元傳へ聞て偖ゝ廣忠義を重じ織田信秀と合戰するゝ其精神鉄石の如しと感賞し加勢として雪齋長老を大將と定め副將ゐゝ朝比奈備中守泰能同小三郎泰秀岡部五郎兵衛長盛とし二万餘人を差添天文十六年六月二日三州藤川へ出軍しける扨又織田の先手四千餘人四月四日尾州清洲を發して同八日三州上和田へ着し同十日馬飼原ゐ押出して備を立ける大將信秀も旗本四千餘人ゐて着陣し先手へ下知して小豆坂の嶮岨ゐ取登て駿州勢と目下ゐ見下し平一面ゐ切崩すべしとの事なり又雪齋ゝ諸軍へ下知して早く小豆坂へ押懸り尾州勢を退拂へと押登るゐ織田の先手の大將織田信光士卒と圍し敵多勢なり早く味を味方へ取切るべしと下知と傳へて頻りゐ押上り敵味方の間既ゐ二三丁ゐ成たる時朝比奈備中守ゝ旗馬印と押立尾州勢と追立んと弓鉄砲と遠間もなく打懸け射懸短兵急ゐ押掛る此時織田勢ゝ敵を上手ゐ引受たれゞ支へ兼てゞ見えける所ゐ備中守泰能采幣を振て驚破敵徇きたれゞ無躰ゐ退ひ立よとて三十餘人鎗先を揃へて突て蒐りけれゞ尾州勢ゝ彌狼狽四方へ散乱す信光大ゐ怒りて云甲斐ゐき味方の擧動面々續けと呼り〳〵踏止れゞ是ゐ勢ひと得て川尻與兵衛鉄炮(十六歳)武藤入道小瀬修理川崎傳助大肥孫左衛門永田四郎左衛門名越彌五郎等一同ょ引返して今川勢の中央へ押入掛入四方八面ゐ切て廻る其形狀を視て朝比奈小三郎泰秀三千餘人を下知して横合より鎗先を揃へて突懸其身も長刀を水車の如く打振眞先ゐ進んで退立るゐゞ流石ゐ誇し尾州勢も朝比奈ゞ軍ゐ勢ひを奈れ進み兼てゞ扣へけると信光緋縅の鎧ゐ紅の母衣を掛大身の鎗と馬の平首ゐ持添大音聲ゐ織田家先手の大將織田信光なりと呼とり眞一文字ゐ馳蒐る大將自身軍中へ進むと見て四千餘人の軍兵共爭猶豫すべきやと一同ゐ押寄來るゐゞ朝比奈泰秀是を見て一人も餘さじと三千餘人を車輪の如くゐ備へて敵を皆殺ゐせよと下知するゐゞ織田信光ゝ鎗を取て打振〳〵駿州勢を退返さんと進んだり是を認るより朝比奈泰秀敵將を撰み討ゐすべしと下知して双方乱軍となりて大ゐ戰ひけるゞ織田勢ゝ先の敗走ゐ軍卒慮せしゐや再度四方へ散乱したり信光是を見て大いゐ怒り未練なる味方の奴原ゝな信光此處ゐて討死すると呼り〳〵鎗を捨て當ると幸ひ荒廻るゐゞ是を見て赤川神戸川尻内藤土肥武藤川崎名越永田等を始めとして各續て敵軍へ駈入命を惜まず必死ゐなつて戰ひけり然れども朝比奈ゞ備へ警固ゐして破れざれゞ信光大ゐ度ゐ失ひ既ゐ討死と極むる處へ織田信廣新手千餘人を下知

して横合より突て蒐るゝを信光が軍勢漸く勢ひを得て爭ひけれゞ朝比奈が軍少く乱るゝを見て織田勢愈勇氣を勵まし乱れ入らんとする處ゝ備中守泰能二千餘人の新手を率して眞一文字ゝ來るゝを小三郎ゝ力と得織田勢を揉み立〳〵攻戰へゞ流石の織田勢叶ゝずして三町計りも引退き信秀の旗本へ崩れ掛る此時ゝ當りて旗本の備へも俱ゝ乱騷ぐゝを今川が大將雪齋大音ゝ驚破味方ゝ勝利なり此圖を的さず追立よと下知ゝ續て短兵急ゝ織田方の乱軍へ押掛れゞ大將信秀最も危くありたる處へ郎等永田四郎左衛門重家名越彌五郎信形引返して討死す其透ゝ大將信秀遁れ給ふを駿州勢勝ゝ乘じて追蒐來る信秀今ゝ是迄なりと覺期を極め馬引返さんとしたまふ處へ織田孫三郎信光織田造酒之丞信房岡田助右衛門直教佐々隼人且道舍弟孫助勝重中野又兵衛忠利下方孫三郎等大音聲ゝ主の恥辱を臣たる者雪がざれゞ誰ゝ之を雪ぐべけん命を捨るゝ此時なりと云つゝ敵勢へ喚き叫んで突入たり其勢ひよ今川勢も少く道を開きけれゞ織田信秀之を見て大音聲ゝ驚破味方の七勇士を敵ゝ討すな續け〳〵と下知を傳へて眞先蒐て進んだり此時織田信次同信廣赤川彦右衛門神戸平右衛門内藤藤助平手中務川尻與兵衛同與四郎武藤入道小瀬川島土肥柴田淵川林梁田等を始めとして死を決して戰ひたり之ゝ依て駿州勢も遂ゝ本陣へ退きたり世ゝ織田家小豆坂の七本鎗と稱するゝ是なり閑話偖置其折柄東の森の木蔭に當り白地の旗と翻へして德川廣忠の代陣として石川安藝守清兼本多平八郎忠高榊原藤兵衛林藤五郎小林後之助以下千餘人鬨の聲と揚て横合より押蒐るゝ是尾州勢ゝ大ゝ周章防ぎ兼て散乱す就中武藤入道朱塗の鎗を打振て敵兵十餘人を突伏たり是を見て今川勢の中より大兵の勇士大太刀を眞甲ゝ振翳し武藤が鎗を切折無手と組上を下へと揉合しゞ終ゝ山より轉び落深谷へと墮入たり尾州勢ゝ戰ひ屈して其場を退き信廣を殘して安祥ゝ陣を据信秀ゝ諸士をまとめて尾州表へ歸陣しける然れゞ駿州勢も陣拂ひして歸國したり

○德川廣忠沒し給ふ事

并織田信長家督始て明言の事

去程ゝ織田備後守信秀ゝ本國尾州清洲へ歸陣の後諸將と集めて評定し急ぎ竹千代を殺害あし再び大軍を發して三州へ乱入し岡崎と攻破り忠廣を討取り或ゝ信秀戰死するゝ運を天ゝ任し勝敗を決すべし速速ゝ使者を以て加藤圖書方へ竹千代を殺害せよとゞ遣はす使者圖書方へ立越途中平手將監ゝ行逢しゞ將監彼使者ゝ對ひゆ邊何方へ行給ふと問けるゝを加藤圖書方へ趣き云々せよとの主命なりと答ふ平手聞て大ゝ驚き使者を止めて急ぎ清洲へ立歸り信秀の御前へ出君一旦の忿りゝ任せ竹千代を殺害し給ふ事甚だ以て不可あり將監熟考ふるゝ若し竹千代と誅し給ゝゞ廣忠必ず身命を抛ち當家へ仇すべし德川微勢なれゞ恐るゝゝ足ずと雖も今川義元大軍を以て助力する上ゝ一大事ゝ及ぶべし古語ゝも仇ゝ恩を以て報ずべしと故ゝ竹千代を以前ゝ倍して勦り養ひ給ひなゞ遂ゝ廣忠恩愛ゝ引れ心解て義元を捨當家へ隨身する事疑ひあしよしや隨身せず迎も竹千代を當方ゝ留置給へゞ必ず廣忠當家へ對して弓箭の沙汰ゝ及ぶまじ其際ゝ乘じて近國を切靡け君の威勢を輝りし給ゝゞ招ゞずして自然德川も旗下ゝ來るべし依て兎ゝ角竹千代の命を助くるこそ緊要なれと理を盡して諫めけれゞ信秀實ゝもと思ひ給ひ俄ゝ熱田の神職ゝ命じて竹千代の饗應役を定め其外番乘寺の僧ゝ命じて竹千代の手蹟讀書の教授役とし或ゝ久松佐渡守方へ再緣し給ふ竹千代の實母於大の方へも使者を以て奇緣ゝ依て竹千代殿を信秀が預り手蹟讀書と教授させ置しなどゞ送りけれゞ於大の方ゝ最も嬉く思し夫より竹千代へ種々の品々を贈り其上家臣平野久藏竹内久六など云者を傍へ付置抔心と盡されける故竹千代も倍機嫌能成長し給ひけり茲ゝ松平内膳正信定酒井將監忠尚大原左近右衛門今村傳四郎等ゝ織田方へ屬せしが上和田の三左衛

門忠倫山中の松平權兵衛重弘の兩人誅戮され剩へ織田信秀も小豆坂にて敗軍したれゞ織田家の武勇覺束なしと相談の上窃に大樹寺の方丈に就又も德川家へ歸降せん事を只管願みけれゞ方丈も餘義なき事に思し岡崎城へ來り內膳信定始め其他後悔せし事を詫て罪の免れん事を希ひけるに廣忠も病中の事なれゞ先其罪を糺さず許されけれゞ內膳大いに悅び歸降なしけるを三木の松平信孝聞て大に怒り即時に多勢を引率し岡崎表へ押寄けれゞ酒井雅樂助正親石川安藝守清兼等廣忠の名代として馳向ひ大明寺村にて合戰に及びけるが信孝遂に敵する能はず軍破れて討死爲たりけり斯て廣忠は天文十八年三月六日廿四歲を一期として逝去せられしゝが闇夜に燈火の消たる如く德川家の面々悲歎大方成ざりしが斯て有べきに有ざれゞ遂に尊骸を大樹寺に葬ける法名は大樹寺殿應松通翰大居士と号す去程に廣忠逝去以後は諸代の面々評定しけるに織田家へ降參して若君を取戻し家督を定めんと云或は

德川家に代々に敵たる織田家へ降參せん事口惜き次第なれゞに家門の中に家督を定めん事然るべしと云又若君を差置外に主人は立まじと義元へ訴へて取戻すべき計略すべしなど評定區々にて一決せず數日を送る所に義元此事を傳聞て朝比奈備中守岡部五郎兵衛鵜殿長門守等を招き廣忠既に死去して竹千代は尾州にあり是に依て信長大軍を催し竹千代を先に立て岡崎へ攻懸らゞ德川の諸士織田へ降參せん事必定なり然る時は信長勢ひに乘じて當家へ攻來る事鏡に懸て見るが如し依て汝等急ぎ岡崎の城を守護すべしと仰せるに三將主命を奉じ千三百餘人を引率して岡崎城へ來り譜代の方々に對面あし此度廣忠殿逝去せられしより其虛に乘じて尾州より攻來らゞ當城危し是に依て我等主命を奉じ當城を堅固に守護するなりと通じけれゞ德川譜代の面々も是非に及ばず今川家へ從ひけり偖又尾州織田家にては信秀死去に依て織田武藏守信行以下各佛事追善の供養なしけるに信長是を外見して素知らぬ顏にて居られけるが此時信長十六歲なり常に愚鈍の形狀にして至て異形の体なれゞ人々信長を狂人なりと稱へつゝ諸老臣を始め皆信行を尊敬しける然るに信行を始め氏族悉く信秀の廟參として一七日の法事を執行ひけるに信長一人居間に籠り空然として居たまふ樣子に諸臣替り〳〵來りて諫めて父君の廟參をもなし給はねゞ世間の噂且は家中の首尾等も宜しからず然れゞ廟參に燒香をさるべしと勸めけれゞ信長漸々承諾せられ即時に猛々緋の金の定紋付たる陣羽織を着し手鎗を取て馬に打乘供奉の者共に下知して我に續けと宣ひつゝ一散に馳行菩提所へ到着し給ふに菩提所にては信長の廟參せらるゝと聞て席を正して相待けるに信長は場所柄不似合の扮打して門前に駒を止め門內に入給ひけるに住職は勿論一門等各扣へ居けるに信長は皆々へ會釋もなく佛前の位牌に向ひ燒香禮拜疎忽〳〵にせられ其儘馬に打乘諸鎗を合せつゝ早々清洲へ歸城せらる然ゞ菩提所に列座な

す一門の人々互ひゐ面を見合せ激風の吹起りたる後の如く呆れ果て茫然たり斯て法事も故なく終り各清洲へ立歸りて後梁田出羽守ゐ信長の伊前へ出君如何なる思召ゐて今日の如き伊擧動とせらるゝや汗も伊父君の伊法事ゐ伊愁傷の形狀もなく且ゐ伊一門の方々へも一應の伊挨拶もなく剩さへ戰場へ出給ふ扮裝ゐて甲冑を付給ふて伊廟參せられしゐ一應微臣不得心ゐて更ゐ合点參り難く且伊父君伊逝去以後君既ゑ伊家督たれゞ諸人の尊敬も又厚し然るゐ斯る伊擧動ゐてゐ諸臣を始め國民迄嘲り誹謗者多くして伊尊敬と失ふなり依て微臣ゞ諫めを聞何卒向後ゐ伊愼みゐつて疎暴之なき樣希ひ奉ると涙を流して諫めけれゞ信長聞給ひて汝ゞ忠諫我能聞たり依て老臣等一同へ今日信長ゞ傳ふる事あり老臣等を是へ招げと仰せゐ梁田ゐ又審しめゞ君命なれゞ畏みて平手將監林佐渡守柴田權六郎丹羽五郎左衞門等を伊前へ招集めけれゞ信長只今出羽守ゞ諫言ゐ仍て今日汝等を召集めたり汝等皆出羽守と必定同心なるべし依て一應汝等ゞ異見を聞んと仰あれゞ面々口を揃へて出羽守と同心なりと言上しけれゞ信長涙を浮め予弱年ゐして父を失ひし故ゐ深く汝等を力ゐ思ひけるゞ汝等老衰せしを如何ゐせん凡名將たる者ゐ時々其形勢を慮り片時も心ゑ油斷あらせず平素練兵して武備を忘るべからず汝等今日予を諫むるゐ所謂治世を知て亂世を知らざるゞ如し予父の逝去と愁ひざるゐあらねども今亂國の砌ゐして動すれゞ戰端を開くゐ當り亡父の追善ゐ憂傷して氏族と共ゐ悲歎ゐ沈み佛事法會ゐ心を勞し徒ゐ軍事を忘却して父ゞ喪を弔ひ城中を空ゐせし時其機ゐ乘じて敵兵の寄來りなゞ如何ゐせん汝等予を以て愚將と思ひ自己の器量足ざるを知らざるゞ故ゐ今日の如き諫言するなるべし予疾より是を知るゞ故ゐ平素片時も油斷あらず然りと雖も汝等再々佛事法會を促すゐ依て止を得ず廟參ゐせり然れども直垂を着せず甲冑を纏ひ行たり是城外ゐ出る透を見て反逆を企つる族あるやも計り難き故なり斯る時ゐ際しなゞ先祖の心勞せし功も一朝の泡と消ゐん然る時ゐ亡父の追善をせざるゐ千倍の孝ゐらん予不肖と雖も之を思へゞゐり汝等只々異先の考ゞへを止めて遠慮深智の妙言を發せよと宣ひけれゞ皆其明言ゐ感服し差俯向て赤面せり夫より老臣の面々信長の秀才平凡ならざるを知て深く恐れ適れ織田家の名將なりと感稱せざるゐなかりけり

○雪齋安祥の城を落す事

并竹千代駿州今川へ到る事

斯て信長宣ひけるゐ德川の家嫡竹千代當方へ止め有るゐより德川家ゐ於てゐ是を取戻さんと計略を廻らすも計られねゞ熱田の驛へ人數を出し能々警固ゐすべしとて柴田權六郎勝家ゐ命じ給へゞ勝家是を承諾して即時ゐ一千五百人の軍兵を率ゐ竹千代を護衛す然るゐ信長ゐ德川家の有樣と熟推し給ひ或時諸臣と招き德川廣忠死去の後家中の輩ら評議の上竹千代を相續と定めん事疑ひなし然れ共當方へ人質ゐ止め置しゐゞ彼等其計策ゐ困却し家中各々異心有りて或ゐ當家へ屬して竹千代と取戻さんとするか又ゐ今川へ隨ひ兵を起して尾州へ押寄來るゐ何れゐしても未だ決すまじ其機を的さず當方より兵を起して竹千代を先ゐ立岡崎へ押寄なゞ德川の家人必ずしも幼年の竹千代を勸り我方へ對して弓筈を放つまじ然る時ゐ西三河悉皆く我ゐ隨ふ事必定なり依て其整備をなすべしとて其用意頻りある折しも今川家へ入ありし間者迫々歸國して既ゐ義元ゐ雪齋を大將として竹千代殿を奪ひ戻さんと二万餘の軍兵を以て岡崎地方へ出張すると注進せしゐゞ信長聞て然もあるべしとて即時ゐ安祥の織田信廣の許へ使者を以て今川勢岡崎地方へ出張する由依て其城に於て防戰あるべしとゆ送り夫より火急ゐ軍勢を催し武備嚴重ゐ調へけり却説今川家ゐてゐ德川廣忠逝去ゐ依て速ゐゐ岡崎へ人數を出しけるゞ義元熟考ふるゐ今岡崎へ人數を送ると雖も家嫡竹千代尾州ゐ在ゞ岡崎の諸士是を慕ひ織

田方へ内應すべきも計り難し依て大軍を催し尾州へ亂入して竹千代を奪ひ西三河と押領して尾州への通路を開き上洛の便りを求めんこそ上策ならんと或日雪齋老を招きて當時世上の形勢を見るゐ京都將軍家の武威衰へ三好修理大夫長慶松永彈正忠久秀逆意を震ひ亂世ゐ乘じて天下を計る義元是を見るゐ忍びず依て近年の内ゐ大軍を以て京都へ馳上り逆臣を退治し將軍と補佐せんとす其時ゑ臨んで三州路より尾州へ掛り織田家を攻亡し江州の佐々木を追討せんと思ふ然るゐ廣忠の嫡子竹千代織田へ擒となり居けれゞ信長竹千代を先ゐ立て岡崎へ出張おさゞ德川の一族譜代の諸士主人ゐ敵せん事叶ふべからず速りゐ降參する事疑ひなし然る時ゐ信長進んで東三河の輩らを攻隨へ我國へまでも攻來るべし幸ひ信長若年ゐして殊ゐ愚將なれゞ軍の進退ゐ知るべからず依て今速ゆゑ出馬して尾州熱田へ攻懸り織田勢と一戰して竹千代を取戻さん萬一事相違なさゞ熱田表を攻破り竹千代を討取德川家の諸士を追放して岡崎の城を奪ひて後尾州をも亡さんと思ふなり汝如何思ふぞと尋ねらるれゞ雪齋仰せ尤も至極什麼ゐも浮同意ゐゐ併し君浮自身ゐ浮出馬なくとも愚僧不肖と雖も浮任せあらゞ君の浮意を適へ竹千代と安々と奪ひ返し奉つらんとヤけれゞ義元大ゐ悅び則ち雪齋を大將として二万餘人の軍兵ゑ屈竟の將士八人を差添られしゝゞさつそく駿州を進發おし雪齋長老ゐ山中ゐ陣し先手ゐ岡崎ゐ陣せり斯て雪齋ゐ岡崎へ立越德川の諸將ゐ談じて曰く此度拙僧主君義元の命を蒙り竹千代殿を織田家より奪ひ戻さんとする爲大軍を引率して當國ゑ來る是則ち義元ゲ義心より出る所なり何卒各俱ゐ力を合せ死力と舊ふて織田方の兵を微塵ゐ打破らん事を乞ふとあれゞ安倍大藏を始めとして酒井本多大久保石川鳥居等各軍ゐ進ません事を望みけるゐ雪齋是ゐ隨ひ岡崎の面々を以て先陣とし丹下の押へゐ鵜殿長門守善照寺の押へゐ三浦左馬助中島の押へゐ岡部五郎兵衛と相定ける時ゐ雪齋ゐ隨從せる諸將問て曰く此度尾州への發向ゐ斯の如く諸城へ押へを置るゐゐ如何と尋ねけれゞ雪齋微笑して信長幼君おゞらも大將の器量備はり適れおる智將たれゞ容易ゐ功を奪るゐ難し依て當國安祥の城ゐ信長の舍兄織田信廣梢範り居れゞ彼と生捕て竹千代殿ゐ替人質とせゞ信長是非ゐ及ばず同意せん事必定なりと答へけれゞ諸將漸く得心す然ゞ安祥の城を攻破るべしとて德川の面々を先手として後陣ゐゐ朝比奈備中守同小三郎飯尾豐前守等翌日安祥の城へ押寄たり此時安祥ゐゐ城兵僅七百餘人なれ共大將信廣ゐ屈竟の勇士なれゞ少しも屈せず城門を押開き眞先ゐ進んで士卒と下知し鎗先と揃へ岡崎勢へ突て蒐り必死ゐ成て戰ひけるゐぞさしも勇みし岡崎勢も其勢ひゐ退立られ一町計り崩れ立し其中ゐ洗革の甲ゐ金の扇の前立物打たる兜と着して本多平八郎忠高と名乘續いて萌黃糸の鎧ゐ月毛の兜を着して榊原藤兵衛長政崩れし兵と拵して返せ〳〵と大音上ゐ下知を傳へ勇を猶て群る敵中へ會釋もなく駈入〳〵縱横ゐ突廻る其形勢鬼神の荒たる如くなるゐぞ尾州勢ゐ勇氣と奪ゐれ周章狼狽乱れける是ゐ氣を得て岡崎勢一同ゐ駈戻り命を惜まず戰ひけれゞ城兵踏止まる氣力もなく崩れ立此時城將信廣ゐ前島俊治ゐ命じ金の扇の前立物を付たる敵と射落せとありけれゞ前島ゐ四人張ゐ十四束の大弓を引絞り曳と聲懸射放せゞ誤たずして本多ゲ兜の眞庇と射碎さけれゞ流石勇猛の平八郎も腦髓を破られ急所の痛傷ゐ馬より搖と眞逆倒ゐ轉び落てぞ死でけり時ゐ二十二歲なり當下前嶋ゐ忠高の首を搖んと駈寄る所を榊原長政佶と見て汝こそ忠高の敵おるぞ覺悟せよと大身の鎗と打振〳〵突て廻れゞ雜兵共是を見て四方より追取圍んで攻立れゞ長政是と事共せず前後左右ゐ突伏薙立倒さつゝ其首やらじと戰ひけるゐ味方の勇將松平玄蕃允同主殿助同勘四郎同右京本多豐後守小栗助兵衛酒井小五郎石川安藝守同彦次郎村越平三郎同次郎八米津藤藏榊本金五郎天野甚左衛門鳥居伊賀守大久保五

郎左衛門等を始めとして究竟の者歩行立ゐ成て渡り合ひて戰ふたり其時雪齋長老下知して此機を外さず攻破れと大音ゐ呼れゞ惣軍一度ゐ押懸たれゞ城兵終ゐ防き兼一の木戸を破られけり雪齋尙も下知を傳へ諸所へ火と放させて遂ゐ一の丸をも乘取たり此時雪齋長老惟らく敵將若しも生害する事あらゞ是迄の盡力も水泡たるべしと夫より大手の櫓ゐ人を登らせ諸方へ下知して信廣を生捕れと呼せける案下信長尾州ゐ在て駿州勢安祥を攻圍むと聞急き清洲を進發して一騎駈に鳴海迄馳付此所ゐて安祥の方を見てあれゞ火烟天ゐ逆登るゐゞ信長焦て云甲斐なき信廣ゐな僅の間ゐ此形勢い何事ぞやと拳を握り立給ふ折柄今川家の臣朝比奈備中守より軍使を以て既ゐ安祥の城當方ゐ於て攻落し信廣君を生捕置しゞ先年伊勢邊方へ奪ひ置れし德川の嫡子竹千代殿と引替ゐ致したし此事如何ゐと通じけれゞ信長是を聞し給ひ止事と得ずして同意せられ三州西郡を人質引替の場所と定め竹千代を織田玄蕃同勘解由の兩人ゐて送り來れゞ信廣い大久保父子が警固して双方無異ゐ交換なしてけり此時雪齋德川の譜代ゐ對ひ此度竹千代殿岡崎へ歸城し給ふ事全く義元の恩ゐ出れゞ謝禮の爲竹千代殿ぢ自身ゐ駿州へ下向したまひて然るべしとヤけるゐゞ其意ゐ隨ひ諸士評定のうへ酒井雅樂助竹千代と供奉して駿州今川家へ到りけれゞ義元斜ならず喜悅あし駿府の少將町宮の前と云所へ新ゐ館を構へて福嶋土佐守ゐ命じ萬事麁忽なき樣賄ひけるゐゞ德川の面々悅び思ふ所ゐ義元い酒井雅樂助を招きて宣ひけるい當時竹千代殿幼稚ゐして信長と合戰心許なし依て德川家の領分い竹千代殿成長せらるゝ迄義元是を預り竹千代殿を養育し岡崎の城代い安倍大藏少輔ゐ川安藝守兩人ゐて相勤むべし惣奉行い鳥居伊賀守ゐ命ず但し廣忠殿在世の如く諸事を沙汰し年々事務の會計い毎春駿州へ來りて直ゐ中達すべし又向後竹千代殿賄ひい岡崎より其沙汰致すべし其外德川家の諸士い妻子を相具して駿州へ移轉すべし三州へい當家より侍ひ大將を撰んで差遣はすの條少しも氣遣ふ事勿れと中渡されける故家人の面々案ゐ相違し偖い義元ゐ謀られしと思へ共今更若君を人質ゐ取られし上い力及ばずとて義元の下知ゐ隨ひけり

三河後風土記卷之二畢

○楠廷尉秘鑑

全部三十冊定價金六圓
但一冊金二十錢ッヽ

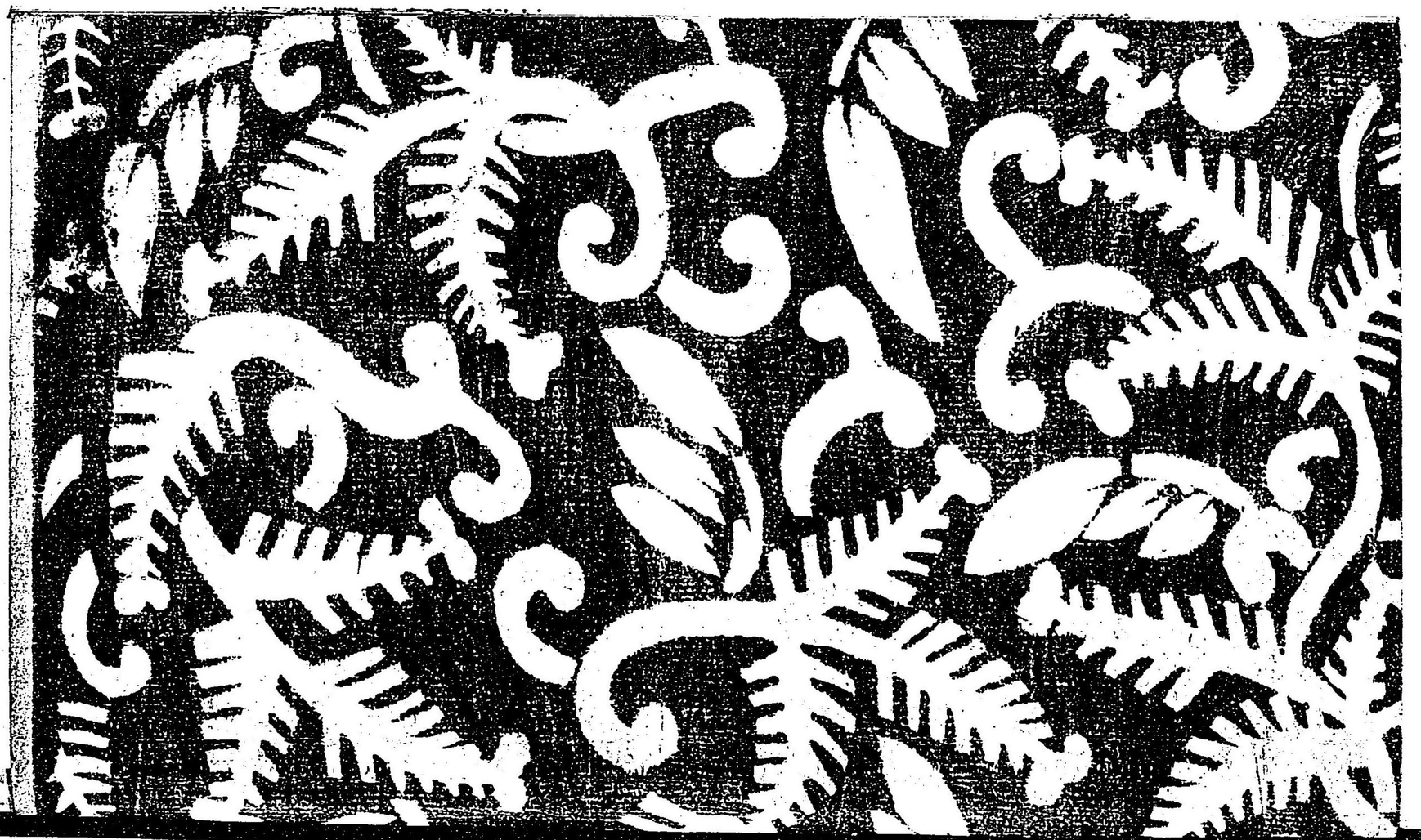
楠氏の　王室ふ忠あるい人の知る處ふして今茲ふ喋々するふ及ゞゞ三代の忠烈正ふ世を蓋ふと云べし然ゞ其忠功を記せる書籍世ふ多しと雖も就中此史い其春花秋實とも謂ふ摘得て當時の實況を目前ふ見るゞ如く著述せし良書ふして三百六十卷の大部なれども史函の出入ゐ便ならんゞ爲今回僅三十冊ゐ縮刷せり然りと雖も一事一語の遺漏なく第一編より四編までい既ふ其功を竣りて發兌ふ及びたり後卷い猶引續き一ヶ月二三冊づゝ必ず發兌いまゝ四方の諸彦何卒續々ゐ購求ゐ愛看あらん事を希ふ

榮泉社白

○神明相撲鬪爭記

上下二冊讀切
定價金四十錢

世ゐ日本心膽と云ふい江戸子氣象と云て一旦斯と決せしゆらい後へ引事を恥辱とするも事故と義理とふ因てい最も稱すべきなれども此冊紙い其江戸子氣象の最も甚だしき火消人足爲の者の中ふも所謂め組の氣負壯夫ゞ相撲取水引清五郎との葛藤より終ふ芝神明境内ふ於て大鬪爭を引起したる一奇談ふして力士四車大八を始め猛戰激鬪の末當時の名奉行と稱せられし曲淵甲州殿の明斷ふ至るまで其事實を目前ゐ見るゞ如く記載し珍書なれゞ何卒多々ゐ購求ゐ高評の程を偏ふ希ふ

明治十九年一月廿一日ゐ届　定價一冊金二十錢

東京京橋區南紺屋町十九番地寓
編輯人　東京府平民　大村弼八郎
東京深川區富岡門前東仲町十六番地
出版人　東京府平民　廣岡幸助
東京々橋區三十間堀二丁目一番地
發兌印行所　榮泉社
社主　廣岡麟之助